

創価大学
国際仏教学高等研究所
年 報

平成17年度
(第9号)

Annual Report
of
The International Research Institute for Advanced Buddhology
at Soka University
for the Academic Year 2005

創価大学・国際仏教学高等研究所
東京・2006・八王子

The International Research Institute for Advanced Buddhology
Soka University
Tokyo・2006

不空音譯敦煌出土佛頂尊勝陀羅尼

Amoghavajra's *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* from Tunhuang

湯山 明 / Akira YUYAMA

目次 / Contents

0. 序 / Introductory

0. はじめに / Prefatory
1. 元代欽定・佛頂尊勝陀羅尼 / The Authorized Version of the Yüan Dynasty
2. 清朝の陀羅尼大全 / A Complete Dhāraṇī Collection of the Ch'ing Dynasty
3. 慈賢音訳・佛頂尊勝陀羅尼・房山石經 / Tz'ü-hsien's Version in the Fang-shan Canon
4. 不空音訳・佛頂尊勝陀羅尼・敦煌出土 / Amoghavajra's Version from Tunhuang
5. 善無畏・金剛智・不空・惠果・空海の伝灯 / *Paraṃparā* of Śubhakarasiṃha – Vajrabodhi – Amoghavajra – Hui-kuo – Kūkai
6. 不空の佛頂尊勝陀羅尼注義 / Amoghavajra's Version with his Commentary

I. 不空・佛頂尊勝陀羅尼・加句靈驗本

Amoghavajra's *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* from Tunhuang

- I-A. 漢字音訳・俱羅馬字音写 / Text Presented with Transliteration
- I-B. 原典再構・俱語順番 / Text Reconstructed with Words Numbered
- I-C. 試訳 / A Tentative Japanese Translation
- I-D. 字母表 / A Table of Phonetic Alphabet

II. 不空・佛頂尊勝陀羅尼注義

The *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* Annotated by Amoghavajra

- II-A. 漢字音訳・俱羅馬字音写 / Text Presented with Transliteration
- II-B. 原典再構・俱語順番 / Text Reconstructed with Words Numbered
- II-C. 字母表 / A Table of Phonetic Alphabet

III. 附録 / Appendices

- III-A. 不空・佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法中之佛頂尊勝陀羅尼 / 漢字音訳・俱羅馬字音写
Amoghavajra's *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* in his *Vidhi* / Text Presented with Transliteration
- III-B. 傳空海所傳梵本・佛頂尊勝陀羅尼・梵漢字雙書本・俱羅馬字音写
The *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* in Siddhaṃ Attributed to Kūkai together with that in Chinese Characters / Text Presented with Transliteration in Roman Script
 - III-Ba. 傳空海所傳・佛頂尊勝陀羅尼・梵漢字雙書本中之梵本・提婆城書体
Text Presented in Devanāgarī
 - III-Bb. 傳空海所傳・佛頂尊勝陀羅尼・梵漢字雙書本中之七佛觀自在菩薩歸依文・俱羅馬字音写
Homage to the Seven Buddhas and Avalokiteśvara Bodhisattva / Text Presented with Transliteration in Roman Script
- III-C. 諸本同音異字比較表
Various Transliterated Indic Sounds in the *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* Texts D, A, B and Z
- III-D. 不空・佛頂尊勝陀羅尼・加句靈驗本・注義・索引
Index to Amoghavajra's *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* Texts D and Z

Michael Hahn zum 65. Geburtstag am 7. Mai 2006

まえがき ミヒャエル・ハーン博士の六十五才の誕生日を祝って記念論文集が計画され、筆者も論叢を献呈すべく親切的な誘いを受けた。今は徒に齢を重ねるのみで、多くのやり損ねた案件の締めがつかない時である。小論も締切り期限に間に合わなかったもので、関連の資料にも少し手を広げて概観することにし、俄仕込みの雑録を添えて本誌に投げ祝意を表することにした。欧文にしようかとも考えたが、印刷に面倒な内容というだけではなく、筆者の最近の関心から、少なくとも序説は邦文で書き置きたかったのである。

ミヒャエルに初めて遇ったのは、三十年余の昔である。筆者はアレクサンダー・フォン・フンボルト財団の上級研究員としてゲッティンゲンにあった。当時、彼は正に新進気鋭のボン大学教授で、ある機会に筆者はデュッセルドルフのロシア語文献の専門店を探索した後に、電車で西独の首府・ボンへ向かった。因みに、その郊外のパート・ゴードスベルクにフンボルト財団の本部がある。ミヒャエルとはボン大学近くのライン河に架かるケネディー橋袂の停留所で待ち合わせることになり、彼は約束通り雨の中に立って待っていてくれた。降車して、すぐに互いを認知しあえた。長い付き合いの始まりである。— ところで彼の記憶力は抜群なので、事実には誤りありと修正されるかもしれない。

このところ残念ながら彼我の往来が少し疎くなってきたが、彼の精力的な活躍ぶりは、折に触れて世界の各地から伝わってくる。わが国の多くの同学の土との交友がある。筆者が、小粒ながら国際的な視野に立つての研究機関を創るべく帰国して努力し始めた時には、彼は真つ先に出張先から足を延ばして飛んできて、聖勇を継ぐ作家の斬新な研究で新しい叢書の創刊をも飾ってくれた。また、筆者の演習に出たことのある若手で、後に彼の指導を得て、大いに進展活躍するものがあるのも嬉しい。今後のミヒャエルの益々の健勝と発展を祈念する。

さて、親切にも、祝賀論集へ参加を誘ってくれたミュンヘン大学のイエンス・ウヴェ・ハルトマン教授も、その頃に知り合ったと記憶している。実は、これまた記憶が怪しいが、彼の両親が旅先のネパールで知り合ったとかでミヒャエルの自宅を訪ねていて、偶々私ども夫婦も紹介されて会食した。ウヴェとは色々の機会に恵まれて交流を深めることができた。フンボルト財団の二度目の招聘で、ゲッティンゲンに1984年末から三ヶ月滞留した時は、大いに学術的談話を楽しんだ。悲しいかな今は亡きハインツ・ベッヒェルト教授の研究助手として頭角を現し、すでにハーン教授を親しく輔けて、叢書類の編集などにも特技を発揮していた。— こうした縁を心に刻みながら、記念論集の成功を遙かに念ずる。

0. 序 / Introductory

0. はじめに

0.0. 『佛頂尊勝陀羅尼』については、専門家でもないのに取り上げてきたが、¹ 筆者なりに理由があった。先ずは面白そうな梵語原典があると、ついぞ飛びつくという性癖のなさしめることで、はた迷惑であろうと思う。しかし、長らく私かに考えていたのは、古期・中期インド語の音韻研究の一資料としてのシナ語音写文献

¹ 湯山明, “演福寺銅鐘の梵語銘文覚書”, 東洋學報, LXVI, 1-4 (= 東洋文庫創立 60 周年記念号) (1985), p. 325-362 [— 以下 “Yuyama 1985” と略して引用].

— 小野玄妙『佛書解説大辭典』IX (1933) 所収の関連項目 (p. 322d-326d; 神林隆淨著) を誰しも見逃すまいが、上記拙稿に『佛頂尊勝陀羅尼』に関する書誌を、別の角度からやや詳しく書いたつもりである。

—, “Die Sanskrit-Texte in Lañ-tsha und tibetischer (Dbu-can) Schrift auf der im Jahre 1346 gegossenen Glocke des Tempels Yeon-Bog-jeol in Korea”, *Ausgewählte Vorträge - XXIII. Deutscher Orientalistentag vom 16. bis 20. September 1985 in Würzburg*, herausgegeben von Esnar von Schuler (= *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Supplementband X) (Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden, 1989), p. 429-434. — [演福寺 (Yeon-bog-sa)]

—, “The *Uṣṇīṣa-vijayā Dhāraṇī* Transliterated by Tz'ü-hsien”, *Bauddhavidyāsudbārakap: Studies in Honour of Heinz Bechert On the Occasion of His 65th Birthday*, ed. Petra Kieffer-Pütz & Jens-Uwe Hartmann (= *Indica et Tibetica*, XXX) (Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag, 1997), p. 729-742 (incl. 2 plates).

—, “An *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* Text from Nepal”, *ARIRIAB*, III: 1999 (2000), p. 165-175.

の発掘であり、延いては日本の梵学資料の探索によって研究史を繙こうということであった。² いうまでもなく、漢語音韻史などは、正に密林であって、迷い込んで出口を見出せなくなることに間違いはないので、この領野に踏み込む積もりも勇気もない。古今東西、数多くの先駆的な業績が光っている。筆者は、ここでは深入りせずに、やっと先学の偉業を仰ぎつつ、若干の資料を蒐集するだけである。

0.1. インド学仏教学の立場から、いわば入口に差し掛かったばかりで、恥ずかしくも中途半端に終わることは必定で、ついぞ成し遂げられそうにないことも明白である。本邦で世紀を隔てて積み上げてきた梵学の伝灯を絶やすことなく、近代インド学仏教学の基礎に立って、極めて精緻に研究調査した高楠順次郎 (1866-1945) の不朽の業績を忘れることはできない。³ この領野は、しかし、実はアジア学全分野の協同なくしてはなし得ないことではある。⁴

0.2. 『佛頂尊勝陀羅尼』に限っても、いうまでもなく原典はインド亜大陸に発するわけだから、彼地に遺る写本類の調査研究も非常に大事であるが、独立の写本が極めて稀で、大部の陀羅尼集などに混在していて、残念ながら量的に矮小の典籍を取り出して入手するのは困難である。⁵ 『佛頂尊勝陀羅尼』は、インド亜大陸から本邦にいたるまでの広範にわたり、複雑に異本・異読を生み出した特異の現象を見せる典籍である。今は将来の組織的な研究調査を待つより仕方ない。

² A. Yuyama 1993, "An Appraisal of the History of Sanskrit Studies in East Asia", *Studies on Buddhism in Honour of Professor A. K. Warder*, ed. N. K. Wagle & F. Watanabe (= *South Asian Studies Papers*, No. 5) (Toronto: Centre for South Asian Studies, University of Toronto, 1993), p. 194-203.

³ この点は最近も述べたところである: "Miscellanea Philologica Buddhica, III", *ARIRIAB*, VIII: 2004 (2005), §3, esp. §3.2.

⁴ See e.g. A. Yuyama, "On and Around the Japanese *Aisa*, 'Goose'", *Journal of the Oriental Society of Australia*, X (Sydney 1975), p. 81-92.

—, "巖松院貝葉頌末記", 勝又俊教授博士古稀記念論集・大乘仏教から密教へ (東京・春秋社, 1981), p. 1269-1278.

—, "妙法蓮華經の藏字音字による敦煌出土写本断簡二点覚書", 雲井昭善博士古稀記念・仏教と異宗教 (京都・平楽寺書店, 1985), p. 233-247. — [*Fonds Pelliot tibétain 1239 et 1269 à la Bibliothèque Nationale de Paris*].

—, "Remarks on the Kōkiji Fragment of the *Lokaprajñapti*", *India and the Ancient World: History, Trade and Culture before A. D. 650*, ed. Gilbert Pollet (= *Professor P. H. L. Eggermont Jubilee Volume Presented on the Occasion of his 70th Birthday*) (= *Orientalia Lovaniensia, Analecta*, XXV) (Leuven: Departement Oriëntalistiek, Universiteit te Leuven, 1987), p. 215-227.

—, "Classifying Indic Loanwords in Japanese", *Saṃvṛtyamaṅgalam: Studies in Honour of Siegfried Lienhard* (Stockholm: The Association of Oriental Studies, 1995), p. 381-393.

—, "Toward a New Edition of the *Fan-yü Tsa-ming* of Li-yen", *Wisdom, Compassion, and the Search for Understanding: The Buddhist Studies Legacy of Gadjin M. Nagao*, ed. Jonathan A. Silk (= *Studies in the Buddhist Tradition: A Publication of the Institute for the Study of Buddhist Traditions, The University of Michigan, Ann Arbor*, ed. Luis O. Gómez) (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2000), p. 397-411.

⁵ Cf. e.g. Lionel David Barnett, "Manuscripts from India and Nepal", *The British Museum Quarterly*, XVI, 3 (1951), p. 68 (MS.Or. 11,788) [cf. M.T.M., *Bibl.bouddh.*, XXIV-XXVII (1950-1954), p. 53a: No. 507]; — cf. Yuyama 1985, p. 360b-361a: n. 52; also Yuyama (1999-2000) (*supra* n. 1 end).

1. 元代欽定・佛頂尊勝陀羅尼

1.0. 最初に筆者が接した『佛頂尊勝陀羅尼』の原典は、偶々朝鮮史の權威・末松保和博士 (1904-1992) から調査を勧奨された拓本資料であった。それは高麗朝の首都・開城の演福寺に遺る銅鐘の銘文の一つである。彼が、演福寺と鐘銘に関しての文献学的な論究を試みて、ついに果たせなかったのは残念の極みである。⁶ — 実は、その資料はゼロックスで撮りなおしたもので、いわば裁断されて、順不同で筆者に届いた。狭い自宅の畳の部屋に拡げて謎解きが始まった。悪戦苦闘の結果、やっと話の辻褄が合い、典籍を比定できたときの感慨は一入であった。— 『佛頂尊勝陀羅尼』と判れば、どの異本だろうかと探索するのが次の作業である。

1.1. 有名な居庸關雲台の門洞内面の六体字石刻文と一致するようだ。これは至正五年 (CE 1345) に始めて問もなく、恐らくは翌年には完成していたものといわれる。⁷ 演福寺の銅鐘は、高麗の忠穆二年 (CE 1346) 鑄刻という。しかも両者ともに元の工匠の手になるものである。しかも同一の文面であることからすれば、まさに元代の『佛頂尊勝陀羅尼』の欽定本というべき貴重な資料ということになる。演福寺の銅鐘の梵語銘文は、朝鮮半島にランチャ (Lañ-tsha / Rañjana) 文字資料の東端を知らせるという点、加えて正確な時点を捉えることができるという点でも、紙面に伝承されてきたものとは比較にならないほど重要である。いうまでもなく訳出の年代と鑄刻・彫刻の年代とには時間のずれがある。しかし両年代の差が、より少なく、以後改変を重ねてきたものとは、大きな違いがあり、重要な資料としての意味を持つことになる。してみれば、これは単に陀羅尼を含む典籍資料として、原典や歴史上の文献学的な研究に留まるだけのものではなく、種々の観点から東アジアの仏教を知る上でも見逃せないことになる。⁸

2. 清朝の陀羅尼大全

2.0. さて、皮肉にも興味深いことは、一字一句違わずに暗誦すべき陀羅尼・真言の類に、かえって異読・異本が目立って多いことである。そこで、清の乾隆帝 (CE 1711-1799) が、滿漢蒙藏の四文字をもって正しく真言陀羅尼を蒐集編修すべきと

⁶ 参看・末松保和, “高麗演福寺鐘銘について”, 東洋学報, LXVI, 1-4 (1985), p. 319-324 — 再録・末松保和朝鮮史著作集, V: 高麗朝史と朝鮮朝史 (東京・吉川弘文館, 1996), p. 117-121.

⁷ 居庸関東壁の六字体合璧・佛頂尊勝陀羅尼刻文については、京都大学から優れた研究成果が出ていて、以前に触れたので省略したい; cf. Yuyama 1985, p. 331, cum n. 7-8 (p. 356).

— この拙稿と殆ど同時に、かつて京都大学居庸関研究班の一員であった長尾雅人 (1907-2005) が著した一点は、佛頂尊勝陀羅尼に関するものではないが、居庸関と居庸関刻文全般についても詳述しているので参考になる: Gadjin M. Nagao, “The Tibetan Eulogy at Chü-yung-kuan”, *Tantric and Taoist Studies in Honour of Rolf A. Stein*, ed. Michel Strickmann, III (= *Mélanges chinois et bouddhiques*, XXII) (= *Publications de l'Institut Belge des Hautes Études Chinoises*) (Bruxelles-Louvain 1985), p. 835-861, incl. a photo and rubbing in facsimile.

⁸ 参看・鎌田茂雄, 朝鮮仏教史 (= 東洋叢書, I) (東京・東京大学出版会, 1987), p. 3 (cum p. 6, n. 2); — cf. Yuyama, *op.cit.* in: *Bechert Volume* (1997), p. 729 (cum n. 2).

の勅令を発したのが1749年、編纂完成は1759年、印刷完了は1773年である。⁹ この『御製滿漢蒙古西番合璧大藏全咒』は、一世紀半後の1928年に上海で覆刻されたというのが筆者は未見であり、¹⁰ 近年北京で覆刻されたというのも定かではない。この貴重な文献は夙にインドで覆刻されたが、これまた残念なことに久しく絶版となっているようだ。¹¹

3. 慈賢音訳・佛頂尊勝陀羅尼・房山石經

3.0. 確たるものではないにしても、年代を知り得る原資料として、房山石窟の藏經中の四二七八下塔に見出す慈賢本『佛頂尊勝陀羅尼』一点 (= 丁字号一～二) は見逃せない。その拓本も、割合に見やすく写真覆刻されている。¹² 慈賢 (= Mañtrabhadra?) に関して知る所は少ないが、早くに慈賢の訳業に注目した任杰の論攷を挙げておきたい。¹³ 幸いに近年の口中両国の専門家による房山石經の研究には目を瞠はるものが多い。石經の発見から既に長い歳月が過ぎたが、訳經史の専門家により更に批判的な評価で蒙を啓いて安心させて戴きたい。ついであるが、前世紀初頭二三十年ほどの間に撮られた鮮明な写真集が出た。往時の状況を知る貴重な資料だと思う。¹⁴

4. 不空音訳・佛頂尊勝陀羅尼・敦煌出土

4.0.0. 『佛頂尊勝陀羅尼』の古印刷巻文が敦煌から出土していることは、実は早くから知られていた。例によって、ペリオ (Paul Pelliot: 1878-1945) の単行書をなすほどの精緻な書評論文の中に、自ら二十世紀初頭に発見した不空 (Amogha-

⁹ Cf. Walther Heissig, *Die Peking lamasistischen Blockdrucke in mongolischer Sprache: Materialien zur mongolischen Literaturgeschichte* (= *Göttinger Asiatische Forschungen*, II) (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1954), p. 136-138 (mit Abb. 18): Nr. 148.

Nicholas Poppe, Leon Hurvitz & Hidehiro OKADA, *Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko* (Tokyo: Toyo Bunko – Seattle: University of Washington Press, 1964), p. 52f.: Nos. 61f.

¹⁰ Cf. e.g. A. von Staël-Holstein, “On a Peking, a St. Petersburg, and a Kyōto reconstruction of a Sanskrit stanza transcribed with Chinese characters under the Northern Sung dynasty”, *Bulletin of the Institute of History and Philology of the Academia Sinica*, Supplementary Volume, I [蔡元培先生六十五歳慶祝論文集] (Peiping 1932), p. 180 n. 2.

¹¹ *Sanskrit Texts from the Imperial Palace at Peking in the Manchurian, Chinese, Mongolian and Tibetan Scripts*, edited by Raghu Vira and Lokesh Chandra in 8 Parts (= *Śatapiṭaka Series*, LXXI, 1-8) (New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1966-1968). — cf. Yuyama 1985, p. 355a-356a: n. 6.

¹² 中国仏教協会編・『房山石經 (遼金刻經)』XXI (北京・中国仏教図書館文物館, 1991.5), p. 499: — cf. further A. Yuyama, *Bechert Volume* (1997), p. 730: §03 (cum facs. on p. 742).

『中華大藏經』(漢文部分), LXVIII (1993), p. 460: — cf. further A. Yuyama, *op.cit.*, p. 730: §01 (cum facs. on p. 741).

¹³ 任杰, “房山石經中保存的契丹國慈賢譯經”, 呂鐵鋼編・房山石經研究, III (香港・中國佛教文化出版有限公司, 1999), p. 105-115, esp. p. 110f. [原載・〈法音〉, 1985年第一期].

¹⁴ 國家圖書館善本收藏部編・北京雲居寺与石經山旧影 (北京圖書館, 2004), 90 p. — ISBN 7-5013-2468-9.

vajra: 705-774 CE) 訳なる『一切如來佛頂尊勝陀羅尼』として先ずは紹介されている。¹⁵ 因みに、ペリオの書評の対象は、残念ながら筆者は実は当該の論点部分を検証していないが、中国の印刷史に画期的な貢献をなしたとされ、若くして夭折したトーマス・フランシス・カーター (1882-06.VIII.1925) の名著である。¹⁶ このペリオの遺稿は、ドゥミエヴィル (Paul Demiéville: 1894-1979) が、¹⁷ これまた懇切な補記・注記を施して公刊して江湖に贈ってくれたものだ。就中、ドゥミエヴィルが末尾に付した補遺は、広くインド学仏教学徒の今に座右不可欠の論攷で、筆者もこよなく愛でる書である。¹⁸

4.0.1. この敦煌出土の不空『佛頂尊勝陀羅尼』が、目録に漸くにして載ったのは、番号順からして当然ながら、ほんの一昔前である。参照すべき文献を余すところなく挙げ、典籍に関する記述は精細を極めていく。¹⁹ ここに欠けていて、もの足りないものは、もっとも残念なことに、まさに原典そのものの良質の複写である。

4.1.0. この九～十世紀にまで遡るとされる巻物が、鮮明に覆刻・公刊されたのは誠に有難く、筆者も今回の調査にはこれに頼った。残念ながら、それは専門家でもないと、不注意に見逃してしまいそうな論集の中に埋もれていた。書物の性格からか、原典を比定して詳細を記録しているわけではなく、単に「仏経」と紹介し

¹⁵ *Les débuts de l'imprimerie en Chine* [Avertissement de Robert des Rotours, p. V-VIII] (= *Oeuvres posthumes de Paul Pelliot*, IV) (Paris: Imprimerie Nationale - Adrien-Maisonneuve, 1953), p. 49: "19. Le rouleau imprimé de Paris", cum n. 1 (par Paul Demiéville).

¹⁶ Pelliot ad Thomas Francis Carter, *The Invention of Printing in China and its Spread Westward* (New York: Columbia University Press, June 1925), p. 208. — この名著は、後にコロンビア大学の後継者でドゥミエヴィルと同年輩のグッドリッジ (Luther Carrington Goodrich: 1894-1986) によって大きな改訂増補を加えて公刊され (1955), 幸いに信頼のおける和訳が出ているが、大方の好評を得ていながら絶版になって久しい。著者自身の序文、夫人の手になる第二版への簡略な経緯や訳注者の序も内容理解を助けてくれる: 戴内清・石橋正子(訳注), *中国の印刷術 — その発明と西伝*, 2冊 (= 東洋文庫, 315-316) (東京・平凡社, 1977), xxxiv, 199 p.; ii, 260, 6 p. (incl. num. b/w figs.). — この増訂版も名著として誉れ高い。博学であったグッドリッジは、製紙・印刷に関しても数多くの論考を公表していることが、その次男の手になる書誌記録で知ることができる: cf. Thomas D. Goodrich ("1927), "Luther Carrington Goodrich (1894-1986): A Bibliography", *JAS*, CXIII, 4 (1993), p. 585-592 (also p. 585b, n. 3); further Amy V. Heinrich, "Anne Perkins Swann Goodrich (July 4, 1895-April 22, 2005)", *JAS*, LXIV, 3 (Ann Arbor 2005), p. 812f.

¹⁷ かつて筆者は、ドゥミエヴィル (= 戴密微: 13.IX.1894-23.III.1979) の生没年月日について誤記をしている (Yuyama, *Burnouf*, 2000, p. 190). ここに詫びて訂正しておきたい。極めて温厚な先生に偶々レイデン・パリ・東京で、親しく拝眉の榮を賜ったことを幸いに思う。

¹⁸ P. Demiéville, "Appendice: Notes additionnelles sur les éditions imprimées du canon bouddhique", *op.cit.*, p. 121-138.

= *Choix d'études bouddhiques (1929-1970) par Paul Demiéville* (Leiden: E. J. Brill, 1973), p. 223-240.

¹⁹ *Catalogue des manuscrits de Touen-kouang. Fonds Pelliot chinois de la Bibliothèque Nationale*, V: N°s 4001-6040. Avec le concours de la Fondation Signer-Polignac, Tome I: 4001-4734 (= *Publications hors série de l'École Française d'Extrême-Orient*) (Paris: École française d'Extrême-Orient, 1995), p. 88: N° 4501.

ている。²⁰ 実は、同じ頃に、敦煌石窟からの仏典の宝蔵を折角に編纂刊行して、研究者の渴を癒してくれた膨大な企画による大冊の中に、鮮明さに欠けるが本典籍の写真覆刻はあった。²¹ 最近の中国での貴重資料の覆刻公刊の動きも本当に有難いが、上海古籍とパリの国立図書館の編集刊行する『法藏敦煌西域文献』が、今に至って当該写本の巻に達していないのは残念である。現今の高度な科学技術によって、電子記憶画像の入手が出来るかも知れないが、恥ずかしくも怠って、上記の資料をもとに解説することにした。大半は判読できそうであるので、不鮮明な箇所を再構築は将来の研究に委せたい。原典自体が加句靈驗本と称しているが、厳密には発音上の注記のみであって、いわば句番も注義もない。この「注義」という観点からすると、不空の『佛頂尊勝陀羅尼注義』(T 974D) が、その師・金剛智 (Vajrabodhi: 671-741CE, 入唐・720) の漢字本に拠ったという東寺三密蔵の古写本を底本に編まれた『佛頂尊勝陀羅尼』(T 974B) に近いのが興味深いと思う。

4.1.1. 製紙・印刷・保存 この所、また、内外でアジアの製紙・印刷・保存の問題への関心が再燃してきている。ことにインド学・仏教学の立場からは、見逃せない動きが目立つので、その界限を一度は雑録しておきたいと願っているが手につかないでいる。漢土に問題を探る限りでも、訳経史の上での資料的意味も大きい。とくに日本・中国で興味深い成果が公刊されているのは周知のことであろう。こうした書物の中にひょっこりと貴重な資料が顔を出したりする。上記のように、原典の比定や研究が目的ではないので、いわば見本として挙げてある。とんだ所で、貴重な資料に部分的にではあるが対面して、しかも他の資料で不鮮明な箇所に苛立ちを覚えた者の解説には十分役立つこともある。²²

4.1.2. いうまでもなく不空 (Amoghavajra: 不空金剛) は、八世紀中葉に漢土で活躍したので、『佛頂尊勝陀羅尼』木版本は、訳出後一二世紀のうちに刷られたものということになる。門外漢で歯がゆいが、専家の諸書を見ると、この木版本は

²⁰ Jean-Pierre Drège, “Le livre manuscrit et les débuts de la xylographie”, *Le livre et l'imprimerie en Extrême-Orient et en Asie du Sud: Actes du Colloque organisé à Paris du 9 au 11 mars 1983*, préparés par Jean-Pierre Drège, Mitchiko Ishigami-Iagolnitzer et Monique Cohen (Institut d'Etude du Livre – Centre National de la Recherche Scientifique: Institut de Recherche et d'Histoire des Textes – Ministère de la Culture: Direction du Livre) (Bordeaux: Société des Bibliophiles de Guyenne, 1986), [p. 19-39]: p. 35: fig. 5 “Sûtra bouddhique. Xylographie (IX^e-X^e siècle). Pelliot chinois 4501”.

²¹ 黄永武主編, 敦煌寶蔵, 第133冊・伯4062-4608號 (臺北・新文豐出版公司印行, 1986), p. 152: 伯四五〇一號・一切如來尊勝佛頂陀羅尼加句靈驗本。

²² 例えば、内外で久しく活躍する錢存訓 (*1910) の近著・鄭如斯編訂: 中國紙和印刷・文化史 [*Chinese Paper and Printing: A Cultural History*] (桂林・廣西師範大學出版社, 2004.5), p. 137, 圖 53: “敦煌發現的唐刻《陀羅尼經》, 印於 9 世紀。法國巴黎國家圖書館藏”; p. 135: “唐代的印刷實物中, 還有數例值得一提, 如在敦煌發現的其他幾種《陀羅尼經》(圖 53)”。— これは『佛頂尊勝陀羅尼』の最初 16 行の写真覆刻である。

初期のものにしては上出来の印刷物なのであろうか。²³ しかし、結論からいって、とても不空の原本が忠実に漢字音に伝承されたとは思えない。不空が当時の長安の発音研究などに貴重な資料を我々に提供してきたことは、今に参照すべきとされるアンリ・マスpero (Henri Maspero: 1882-1945) の著名な論攷などからも知られている。²⁴ 従って、敦煌本は、恐らくは書写者が単に不注意であったのか、インド語の発音に通じていなかったのか、発音符号は問題にせず漢字音を並べれば原文を暗誦できたのか、文字通り機械的に還梵すれば誤読とされてしまうものが散見される。²⁵ ただ、敦煌本は、印刷の墨の汚れか染みで鮮明さを欠く部分を除いては、原典を容易に復元できると思う。ただし、単語や成句の欠落があったと思しき読みもありそうで、復元したものが正しく本来の原典を伝えているか否かは別の問題である。ところで、マスperoの成果は、幅広い学術的環境に育まれながら、夙に安南語の音韻研究を基礎に長安方言を研究して成ったものといわれる。²⁶

5. 善無畏・金剛智・不空・惠果・空海の伝灯

5.0. この敦煌出土の『佛頂尊勝陀羅尼・加句靈驗本』は、不空訳とあるからには、関連の典籍として彼の『佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌』一卷に文字通り儀軌として唱誦する『尊勝陀羅尼』(T No. 972: 漢字陀羅尼梵本, p. 367a25-b28) (cf. Yuyama 1985, p. 346: No. 6) が現存するので、両本の比較が重要となろう。ここで大正蔵が高麗版を底本にし、その校合に用いた甲乙二本うち、いわゆる㊟として脚注されている写本は、文和二年 (1353 CE) の書写になり高野山寶壽院にあったものであるが (T XIX p. 364, n. 8), これが続蔵本 (= Z) の漢字音写に近いことに注意したい。ただし、語・句の番号付が、非常に不注意になされていて、どこに基準を置いたのか理屈はつけられても、その意図が判然としない:

²³ 最近刊行された次著は、少し簡略であろうが、印刷の歴史を鳥瞰するのに参考になった: 米山寅太郎, 図説中國印刷史 (= 汲古選書, XL) (東京・汲古書院, 2005), (i), xix, 283 (incl. num. ills.), 11 p., 4-page pl. [傳嘉年・序/沈燮元・跋]; 参看・陳力 (中国国家図書館副館長), “<中国印刷史>の研究について — 米山寅太郎『図説中國印刷史』発刊に際して —”, 汲古, No. 47 (2005.7), p. 60-64 (含訳者・高橋智・あとがき).

²⁴ Henri Maspero, “Le dialecte de Tch’ang-ngan sous les T’ang”, *BEFEO*, XX, 2 (1920), p. 20 (out of p. 1-124); cf. e.g. W. South Coblin, *Studies in Old Northwest Chinese* (= *Journal of Chinese Linguistics*, Monograph Series, IV) (Berkeley 1991), p. 4: §1.2 (with lit.).

— つい最近には名著も中国に紹介された: 聶鴻音訳・唐代長安方言考 (= 世界漢學論叢) (北京・中華書局, 2005), [(ii), 3, 5, 204 p.], p. 12f: “不空學派的密咒對音”.

²⁵ 不注意な例を二三挙げれば、婆伽羅帝: *bhāgavate* (不要な長音記号) / *bhag°*; 鉢囉底尾始瑟陀野: *parativīṣṭāya* (子音合成記号欠) / *prati°*; 怛你也他: *tad-yatha* (長音記号欠) / *°-yathā*; 等々!

²⁶ それにしても、第二次世界大戦の犠牲になってしまったのは悔やまれる。マスpero (馬伯樂: Paris 15.XII.1882-Buchenwald/Weimar 17.III.1945) の業績については、後継のドゥミエヴィルが、例によって正鵠を得て斯学の未来を考察し示唆に富む: e.g. Paul Demiéville, “Henri Maspero et l’avenir des études chinoises”, *T’oung pao*, XXXVII (1947), p. 16-42.

(367a25) 曩慕^引婆^引謁^引帝^引 恒^引囉^引 路^引 枳^引 也^引 (26) 鉢^引 囉^引 底^引 以^引 三^引 尾^引 始^引 瑟^引 吒^引 也^引 ... (b18) .. 薩
 囉^引 薩^引 恒^引 囉^引 四^引 十^引 六^引 難^引 上^引 左^引

namo bhāgavate1 trai-lokya-2prati3viśiṣṭāya4 ... sarva-satvā46nāṃ ca

5.1. ここで更に比較のために極めて重要と思しきものが、京都の教王護國寺・東寺三密藏古写本を底本に編んだ『佛頂尊勝陀羅尼』(T No. 974B: 各欄 30 行・梵漢両字併記の陀羅尼梵本, XIX p. 367b21-385c, end; cf. *Yuyama 1985*, p. 347: No. 9) である。その奥書に、本尊勝陀羅尼に種々九点あり、件の梵本とは弘法大師・空海が留学中に恵果阿闍梨 (746-805 CE) から授かった貝葉梵本であり、さらに過去七佛・觀自在菩薩への歸依文が挿入されていることなどの特徴を明記していて、²⁷ 善無畏 (Śubhaṃkarasimha: 637-735 CE) から金剛智・不空・恵果・空海への師資相承も見てとれ、梵本伝承の経路を知るうえで極めて興味深い資料にもなるろう。²⁸

(T XIX p. 385c20-29): .. 此陀羅尼凡有九本。所謂 ... 不空三藏等所譯本。... 弘法大師所傳梵本等也。之中今以弘法大師梵本。與金剛智三藏所譯加字具足漢字本所雙書也。件梵本是弘法大師在唐之日。惠果阿闍梨所授多羅葉梵本也。七佛及觀音梵號裁干此中。異他梵本也。後人知之 /

5.2. この悉曇字梵本が底本であり、漢字梵本は八世紀に活躍した不空の師・金剛智「所譯加字具足漢字本所雙書」が原典とあれば、正しく比較校合に重要な一点であろうと氣は逸る。この建久二年 (1191 CE) の原本を実見できずに残念であるが、今に現存しているのだろうか、怠って問い合わせてもいない。これが目錄に載っているのかも定かでないが、恐らくは連綿と伝承されて今日に至っているに相違ない。²⁹ もっと欲をいえば、空海将来の貝葉本が、どこかに眠ってはいまいか。建久本を大正藏の編者も忠実に編んでいるようで、十二世紀末の本典籍の性格を知るのにも役立ち貴重である。この梵本は、しかし、脱落・誤写が目につく。³⁰ 特に長音記号を書き忘れていることが多い。³¹ 漢字梵本で氣がつくのは、いわゆる陀羅尼に特徴的な口偏を付けた漢字が少ないことである。³²

6. 不空・佛頂尊勝陀羅尼注義

6.0. 筆者が、異本・異読の対象となり、比較対照の好材料と判断したのは、不空

²⁷ Cf. *infra* III-Bb: “七佛觀自在菩薩歸依文”。

²⁸ この空海に至る師資相承を見るのに最も直截的な資料を提供してくれると思う好著がある：勝又俊教、弘法大師の思想とその源流 (東京・山喜房佛書林, 1981), p. 317-348: “第十章・恵果和尚伝の研究”, esp. p. 331f., et al.

²⁹ 筆者には探索の術がないが、後世も佛頂尊勝陀羅尼が勤修されたり、尊勝陀羅尼衆という寺僧組織ができていたりするようだ：参看・上島有、東寺・東寺文書の研究 (京都・思文閣出版, 1998), c.g. p. 25 et 64.

³⁰ 脱字の一例：समन्त / 三滿 (*saman*) で「多」字を落とす (T XIX 385c9/ 10)。

³¹ 若干の例を挙げれば, āvara ābāra ⇒ āvara ābara, viśodbaya viśadbaya ⇒ viśodbaya viśodbaya.

³² 例えば, 羅・囉, 隸・隸, 縛・縛, 囉。

の『佛頂尊勝陀羅尼注義』(T No. 974D: XIX p. 388b5-c, end)である。『注義』とあるからには、原典を確認できて、異同を解明できると思ったからである。これは、残念ながら、必ずしも当たっていなかった。両典籍を比較してみて、果たして不空自身に決定した『佛頂尊勝陀羅尼』原典とインド語音の漢字音写法が確立していたのか、今は疑問に思うしかない。しかし比較を試みるに足る典籍が眼前にあることは確かである。なお、『大正新脩大藏經』の編者は、『佛頂尊勝陀羅尼注義』をいわゆる『續藏經』を底本に転写・編纂している。³³ これは、本邦のみに伝承したものであろう。典籍の跋にあるように、寛永二年(1625 CE)、享保三年(1718)、そして文政六年(1823)の書写聯繫の年代が明記してあり、長きに亘って連綿と継承してきた貴重な記録をもつ典籍であることを知る。

6.1. 来歴が判然としているにもかかわらず、誠に残念ながら、この『佛頂尊勝陀羅尼注義』の原写本の在處が今に判然としない。これは探索してみる値打ちが十分にあらう。この探検話は、少しく雑学的にならうから、例によって本号末の雑録に場所を得たいと思う。

7. おわりに

7.0. 不明の案件を多く残しての擱筆である。本論でも、残念ながら更なる追及をする余裕を失ってしまった。また、異なる面での興味も尽きない。本典籍は物語集などの古典文学にも登場する。なお、わが国には、未だに研究者を待って埋もれている梵学資料が極めて多い筈である。思いも寄らぬ所に眠る未知の貴重なもの、ある時期から行方が知れなくなってしまったものなどである。今後の調査・研究に期待したい。

略 号

A = Taisho 972 / 不空・佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌

B = Taisho 974B / 傳空海・金剛智／京都・教王護國寺・東寺三密藏古写本・佛頂尊勝陀羅尼

CBEITA = Chinese Buddhist Electronic Text Association (Taipei)／臺北・中華電子佛典協會版・大正藏

D = Tunhuang Version／敦煌出土木板刷・不空・佛頂尊勝陀羅尼

T, Taisho = 大正新脩大藏經

Y = Yuan: 居庸關雲台門洞内面六体字石刻・演福寺銅鐘鑄刻碑銘中之佛頂尊勝陀羅尼

Z = Zokuzō／不空・佛頂尊勝陀羅尼注義・『新編・正續藏經』, CIV (臺北・新文豐出版, 1994), p. 672b-673b.

³³ 筆者は台北から出た藏經書院刊行の覆刻版を用いた: 『新編・正續藏經』, CIV (臺北・新文豐出版, 1994), p. 672b-673b. ただし、本典籍は、その目録(目次)の「中國撰述・真言宗著述部」にあるべきを欠いている。編集者が、本典籍を『加句靈驗佛頂尊勝陀羅尼記一卷／唐・武徹述』の中(p. 668a-673b)に包含してしまったとみえる。

I-A.

不空・佛頂尊勝陀羅尼・加句靈驗本*
 Amoghavajra's *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* from Tunhuang:
 Text Presented with Transliteration

(Line 1) 一切{如來}尊勝佛頂陀羅尼 加句靈驗本

(.2) {○○}朝灌頂國師三藏大廣智不空譯

(.3) 曩謨^引婆去^引 1 誡^引嚩帝^引怛^二嚩^二路^引枳^引 (.4) 也^三鉢囉^二底尾始瑟姪^二野^引
namo bhāgavate trai-lokya-prativiśiṣṭāya

沒駄^引野^(.5)婆^法 1 誡^引嚩帝^引怛你也^二他^二嚩^引尾^二𑖀^引 2 (.6) 駄^引 3 野尾^二𑖀^引 駄野^(.7)
buddhāya bhāgavate tad-yathā oṃ viśodbhāya viśodbhaya

娑^上麼^上娑摩^三去^(.7)滿^路 嚩婆^去娑^去 <娑> 頗^二囉拏^五 誡^引誡底賀^(.8) 曩^引 6
samaṃ sama⁴-samantāvabhāsa-<s>pbaraṇa-gati-gabana-

{薩} 嚩^二婆^去 嚩尾^律 第阿^上 (.9) 鼻{誡}左覲^引𑖀^引素誡^引哆嚩囉^(.9)
svabhāva-viśuddhe abhiṣīcatu māṃ sugata-vara-

* Hereunder I will try to transliterate the text from the readings in Chinese characters without inserting missing signs, such numerous examples as long vowels. It is also to be noted at the same time that this text (abbreviated as *D* hereinafter) gives a long vowel sign on wrong places, e.g. *D* 2: 娑^去 誡^引嚩帝^引: read *bhagavate*! Further, {} is used for the place with ink blurred, and <> for missing words in the blockprint text. Strictly speaking, this is not a critical edition. Cf. also *infra* III-A: *Text A* (= Taisho No. 972) fn.*!

¹ This long-vowel sign must be deleted, i.e. *bhag*°!

² 𑖀 is a strange character, which should doubtlessly be for 𑖀, as seen in *Text Z*, i.e. *so*!

³ This long-vowel sign must be deleted, i.e. °*dbhaya*!

⁴ 娑麼^上娑摩, i.e. *samaṃ sama*-°: cf. *Text Z*, n. 4!

⁵ This may easily be reconstructed with a missing character 娑, due to its duplication: i.e. 娑頗^二囉拏, i.e. *spbaraṇa*°: cf. *Text Z* 17: 娑頗^二囉拏^上.

⁶ This may again be a simply scribal mistake: 誡^引誡底賀^引, i.e. °*gagatiganā*-°, which must be confused with °*gati-gabanā*-°, i.e. 誡^引底誡^引賀^引! It may also be possible to read it: 誡^引底誡^引賀^引, i.e. °*gati-gagana*-, as seen below, i.e. *D* 35: 誡^引誡^引賀^引, i.e. *gagana*-. Cf. *T* XIX: 362c3 & 7: 揭底^引喝娜 & 伽伽那, i.e. *gati-gabana*- & *gagana*-°!

阿^去庚⁸ 散^去駄^引囉^引拏^引式^引駄^引野^引(12)式駄野識識曩尾梳第鄔瑟拏^合灑
 āyuh-sambhārni śodbaya śodbaya gagana-viśuddhe usnīsa-

(13) 尾{惹野}尾梳弟娑賀娑囉_合囉濕茗_合 (14) 散祖你帝薩喇
vijaya-viśuddhe sahasra-raśmi-samcodite sarva-

怛他^去誡^引哆^引嚩^引路^引迦^引。(15) 頻^上沙^上吒^上播^合囉^引弭^引哆^去跋^引哩^引布^引囉^引。(16) 拈
tathāgatāvalokani śat-pāramitā-paripūrāni

薩嚩怛他^{大引}誡哆訖哩^{下合}娜野^{引9}地(17)瑟吒^{仁引}曩地瑟恥^{下合}哆摩賀
sarva-tathāgata-brdayādbisthānādbisthita-mahā-

母捺哩⁽¹⁸⁾ 合 轉 日羅^二 合 迦^迦 野僧^{思孕反} 賀多曩尾柁⁽¹⁹⁾ 第
mudri vajra-kāya-sambātana-viśuddhe

薩嚩囉拏播野訥唎^合 (20) 底跛[哩]尾穉弟
sarvâvaranâpaya-durgati-parivissudde

鉢囉_合底賴轍囉多_合(.21)野阿_{去引}欲秣第三摩野地瑟恥_合帝麼(.22)拈
pratinivartaya āyub-śuddhe samayādbistbite mani

麼拈摩賀麼拈怛闍哆_{去聲}部哆(23)句⁴¹致跋哩桃第
maṇi mahā-maṇi tathatā-bhūta-koti-parisuddhe

⁸ This may well have to be emended to 阿𑖀, so in *Text B* (= T XIX 384c18: 阿𑖀 = *āyuh*^{-o}). Cf. 周法高(主編), *漢字古今字彙 / A Pronouncing Dictionary of Chinese Characters in Archaic & Ancient Chinese, Mandarin & Cantonese* (香港 1973), No. 2315 (𑖀), 2336 (𑖀); Bernhard Karlgren, *Grammata Serica Recensa* (Stockholm 1972), No. 746a (𑖀), 126a/b (𑖀); also Robert Heinemann, *漢梵・梵漢 ダラニ用語用句辞典 / Chinese-Sanskrit Sanskrit-Chinese Dictionary of Words and Phrases as Used in Buddhist Dhāraṇī* (Tokyo 1985), p. 40f.: 阿𑖀・阿𑖀・阿𑖀, i.e. *āyus-lāyuh*! Cf. further *Text D Table n. 13*!

242

尾娑普_{二合}吒沒地_{二合}秣_{二合}(.24)第惹野¹⁰尾惹野尾惹野_引¹¹娑麼_{二合}(.25)囉娑麼_{二合}囉
visphuṭa-buddhi-suddhe jaya vijaya vijayā smara smara

薩嚩沒駄_引地瑟恥_{二合}多_{二合}(.26)秣第嚩口哩_{二合}嚩日囉_{二合}_引¹²嚩囉陞_{二合}
sarva-buddhābhiṣṭhita-suddhe vajri vajrā-garbhe

嚩日囉_{二合}(.27)_{二合}_引婆去_引嚩觀¹³麼麼_名設哩嚩薩嚩薩怛_{二合}(.28)嚩_{二合}{難者}
vajrāṃ bhāvatu mama śarīraṃ sarva-satvānāṃ ca

{迦_引}野跛哩尾秣第薩嚩識底_{二合}(.29)跛哩尾秣第薩嚩怛他嚩哆_引室者_{二合}銘
kāya-parivīśuddhe sarva-gati-parīśuddhe sarva-tathāgatāś ca me

三_{二合}(.30)_{二合}麼_引濕嚩_{二合}娑琰觀薩嚩怛他去_引嚩多
samāśvāsayantu sarva-tathāgata-

(.31) 三_{二合}麼_引濕嚩_{二合}娑地瑟恥_{二合}帝沒地_{二合}(.32)野_{二合}{沒地}野_{二合}¹⁴
samāśvāsādbhiṣṭhite budhya

冒駄野冒駄野¹⁵三_{二合}母哆跛哩_{二合}(.33)秣第薩嚩怛他嚩哆
bodbaya bodhaya samanta-parīśuddhe sarva-tathāgata-

紇哩_{二合}娜野_引地_{二合}(.34)瑟姪_{二合}_引婁地瑟恥_{二合}多摩賀_引母捺哩_{二合}娑_{二合}(.35)嚩_{二合}{賀}
brdayādbhiṣṭhānādbhiṣṭhita-mahā-mudri svāhā

(.36)佛{頂尊勝}陀羅尼一卷

¹⁰ One expects to see 惹野, i.e. *jaya!*, repeated like in some other versions, e.g. *Text Z* 74-75!

¹¹ The long-vowel sign must be deleted: i.e. 尾惹野: *vijaya!*

¹² This long-vowel sign must be deleted: i.e. 嚩日囉_{二合}: *vajra-°!* Cf. further *Text D Table I*, N.B.!

¹³ Here *vajraṃ* is a predicate, not an acc.sg.fem., with the subject *śarīraṃ*, nom.sg. Cf. further Heinemann p. 133: 縛日藍, *vajrāṃ*, acc.sg.fem., p. 135: 縛日藍, *vajraṃ*, acc.sg.<m.nt.>, for which I have not checked with them in the actual texts. — Cf. further *Text D Table I*, N.B., also *Text Z* n. 17!

¹⁴ {沒地}野_{二合} is not repeated here, as is seen in *Text Z* 103-104, and elsewhere, e.g. Y: *buddhya buddhya!*

¹⁵ Comparing with some others, this version has omitted several phrases after this passage.

I-B.

不空・佛頂尊勝陀羅尼・加句靈驗本
原典再構Amoghavajra's *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* from Tunhuang
Text Reconstructed

namo bhagavate // trai-lokya-prativīṣiṣṭāya buddhāya bhagavate //
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)

tad-yathā / / oṃ / viśodbhaya viśodbhaya //
(8) (9) (10) (11) (12)

samaṃ sama-samantāvabhāsa-spharaṇa-gati-gaḥana-svabhāva-viśuddhe /
(13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21)

abhiṣiṅcatu māṃ sugata-vara-vacanā-amṛtābhiṣekaḥ //
(22) (23) (24) (25) (26) (27) (28)

āhara āhara / āyuh-saṃdhārṇi / śodbhaya śodbhaya //
(29) (30) (31) (32) (33) (34)

gagana-viśuddhe / uṣṇīṣa-vijaya-viśuddhe //
(35) (36) (37) (38) (39)

sahasra-raśmi-saṃcodite / sarva-tathāgatāvalokani / śaṭ-pāramitā-paripūraṇi /
(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48)

*sarva-tathāgata-hṛdayādhiṣṭhānādhiṣṭhita-mahā-mudri / vajra-kāya-saṃbatana-
viśuddhe //*
(49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58)
(59)

sarvāvaraṇāpaya-durgati-pariviśuddhe // pratinivartaya // āyuh-śuddhe //
(60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67)

samayādhiṣṭhite //
(68) (69)

maṇi maṇi mahā-maṇi / tatbatā-bhūta-koṭi-pariśuddhe // viśphuṭa-buddhi-śuddhe //
(70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80)

jaya vijaya vijaya / smara smara / sarva-buddhādhiṣṭhita-śuddhe //
(81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89)

vajri vajra-garbhe / vajraṃ bhavatu mama śarīraṃ sarva-satvānāṃ ca //
(90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99)

kāya-pariviśuddhe // sarva-gati-pariśuddhe //
(100) (101) (102) (103) (104)

sarva-tathāgatāś ca me samāśvāsayantu //
(105) (106) (107) (108) (109)

sarva-tathāgata-samāśvāsādhiṣṭhite / budhya bodhaya bodhaya // samanta-pariśuddhe //
(110) (111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118)

sarva-tathāgata-hṛdayādhiṣṭhānādhiṣṭhita-mahā-mudri //
(119) (120) (121) (122) (123) (124) (125)

// svāhā //
(126)

I-C.

不空・佛頂尊勝陀羅尼・加句靈驗本

— 試訳 —

A Tentative Japanese Translation

・ 前言 ・

この陀羅尼の試訳は、まさしく本来不翻のものを、文字通り試みに訳したものである。陀羅尼の本意がどこにあるのか、とくに長い語句を連ねた真言は筆者の能力を遙かに超えている。いわば合釋が判らない。まったく自信がもてない。本来は、**専門家**に委ねるべきものに相違ない。先ずは、原典の再構築を図ることが大事であった。以下は、**不器用**にして乱雑な、恐らくは誤解・誤謬に満ちた試訳であると思う。かなりの長編というべきいわゆる元代欽定版の佛頂尊勝陀羅尼 (= Y) と比較してみると、解釈の上からも興味深い点が多々浮かびあがるが、これとても疑問を氷解してくれるわけではない。数多くの真言陀羅尼を知って、はじめてできる仕事である。佛頂尊勝陀羅尼だけとっても、諸本すべてを比較する暇はない。ここでは少なくとも、種々の読みについては、原典二点 (= D・Z) に注記した。本邦に伝わり、はじめて『續藏經』に記録された『注義』があるので、筆者の脚注もこの本に集中して記した。あちこちを参照する不便をお許し戴きたい。

(1-2) 世尊に帰命する。(3-7) 三世において最も勝れた佛世尊に帰命する。

(8-9) それは次のように。(10) 唵。(11-12) よく浄めよ。よく浄めよ。

(13-21) まさに等しく普遍の光明の拡散によって、所帰趣と陰難処の自性の、よく浄められたものよ。

(22-23) 私を灌頂せよ。(24-28) 善逝の選り抜かれた言辞をもつ、甘露の灌頂をもつて。

(29-30) 取り去れ。取り去れ。(31-32) 寿命の保持者よ。(33-34) 浄めよ。浄めよ。

(35-36) 虚空のごとく、よく浄められたものよ。(37-39) 頂尊勝のごとく、よく浄められたものよ。

(40-42) 千もの光線によって啓発されたものよ。(43-45) すべての如来を鑽仰するものよ。(46-48) 六波羅蜜を完満せるものよ。(49-55) すべての如来の心の加持によって加持された、大印もてるものよ。(56-59) 金剛の體の集合のごとく、よく浄められたものよ。

(60-64) すべての障碍と墮陰の惡趣から全く浄められたものよ。(65) 転廻せよ。

(66-67) 寿命のごとく、より浄められたものよ。

(68-69) 約定によって加持されたものよ。

(70-73) 宝珠よ。宝珠よ。大宝珠よ。(74-77) 真如の存在の際限にあつて、全く浄められたものよ。

(78-80) 高遠な覚悟によって浄められたものよ。

(81-83) 勝てよ。さらに勝てよ。さらに勝てよ。(84-85) 憶念せよ。憶念せよ。(86-89) すべての仏陀によって加持され、浄められたものよ。

(90-92) 金剛杵をもてるものよ。金剛杵を胎藏とするものよ。(93-99) 金剛杵となれ。私の、そしてすべての衆生の身体は。(100-101) 体軀の全く浄められたものよ。

(102-104) すべての所趣の全く浄められたものよ。

(105-109) また、すべての如来は、私を鼓舞せよ。

(110-113) すべての如来の鼓舞によって加持されたものよ。(114-116) 覚れ。覚らしめよ。覚らしめよ。

(117-118) あまねく全く浄められたものよ。

(119-125) すべての如来の心の加持によって加持された、大印もてるものよ。

(126) 幸あれ！

訳文後注

(3-7) Cf. Y 11-12: *te namah* 「汝に帰命する」と「佛世尊なる汝」に敬礼する。

(11-12) 通常は、この前段に単純に *śodhaya śodhaya* 「浄めよ。浄めよ。」があつて、*viśodhaya viśodhaya* が生きてくる。場合によっては、*pariśodhaya* に連なる。

(13-15) いわば同義語の繰り返し。「まさに」(*samaṃ*, “rightly”)を「比類無く」(*a-sama-*, “incomparably”)と読む例もあり。Cf. also *Text* Z.n. 4.

(22-28) Cf. *A* (T XIX 384c9/11/13-12/14/16: *both in Chinese & Siddham scripts*): *abhiṣṇatu mām sugata-vara-vacana-amṛtābhiṣekai* <h> (missing *sarva-tathāgatā* <h>) *mahā-mantra-padai* <h> (missing *mudrā*); Y 30-42: *abhiṣṇantu mām sarva-tathāgatāḥ sugata-vara-vacanāṃṛtābhiṣekair mahā-mudrā-mantra-padaib*: 「すべての如来は ... 大印真言の句をもった ...」。

(35-36) Cf. e.g. Y 52-54: *gagana-svabbāva-viśuddhe*: 「虚空の自性にごとき、よく浄められた」。

(37-39) Cf. e.g. Y 55-57: *uṣṇīṣa-vijaya-pariśuddhe*: 「佛頂尊勝のごとく、よく浄められたる」。

(43-48) 注義本に欠く。他本には見られる。同類の語群に書写者が惑わされたのであろう: cf. *Text* Z.n. 8.

(66-67) Cf. e.g. Y 91-93: *mamāyur-viśuddhe* / 「わが寿命のごときより浄められたる」。

(68-69) Cf. e.g. Y 94-98: *sarva-tathāgata-samayādhiṣṭānādhiṣṭite* / 「すべての如来の約定の加持によって加持されたる」。

(70-73) Cf. e.g. Y 99-113: *oṃ muni muni mahā-muni / vimuni ... / mati ... / mamati sumati* /

(78-80) この読みが古く正しいかも知れない。Cf. e.g. Y 118-119 / 120: *visphūta-buddhe / śuddhe* / (100-104) Cf. e.g. Y 168-176: *kāya-pariśuddhir bhavantu* (read perh. *bhavatu*) *me sadā sarva-gati-pariśuddhiḥ ca* / 「われに常に体軀の清浄とすべての所趣の全き清浄とがあれ!」。これによって、実は、次の *ca* (D 107) に連なっていく。ところが、Y には次の D 110-113 がない!

(117-118) Y 本などは、ここまでかなりの文面を連ねる。ここは、*samanta-raśmi-pariśuddhe* (Y 201-203) となる。

(119-125) Cf. e.g. Y 204-216: *°dhiṣṭite / mudre mudre mahā-mudre / mahā-mudra-mantra-pade* // 微妙に異なる内容と意図していることになる!

b			沒 ¹⁰				目
bh	婆	鼻	部		[陞]		
m	摩麼 ¹¹	彌	母	蜜 ¹²	銘		謨
y	也野		欲庚 ¹³				
r	羅囉	哩 ¹				囉	
l							路
v	嚩𑖀	尾					
ś	設	始	梳 ¹⁴				𑖑 ¹⁵
ṣ	漉沙				曬		
s	娑𑖑 ¹⁶		素				
h	賀			紇哩𑖑			

2. Nasals /Anusvāra / Visarga:

	<i>aṃ / āṃ / an / aṅ</i>				<i>-in</i>	<i>-uḥ</i>		<i>om</i>
m, n, ñ	𑖓 <i>raṃ</i> , 散 <i>saṃ</i> (<i>san</i> , <i>saṅ</i>), 僧 <i>saṃ</i> ; 𑖓 <i>māṃ</i> , [難] <i>nāṃ</i> ; 滿 <i>maṃ</i> , 𑖓 (=曼) <i>maṃ</i> , 琰 <i>yaṃ</i> .				𑖓 <i>sin</i> ¹⁷			𑖓 𑖓
ḥ						庚欲 ¹³ <i>yub</i>		

3. Consonant Clusters (with or without a sign of compound characters, i.e. 𑖑):

	a	i	u	e	ai	o	aṃ
k-y	<i>k-ya</i> 𑖑 𑖑						
j-r	<i>j-ra</i> 𑖑 𑖑 𑖑 𑖑	<i>j-ri</i> 𑖑 𑖑					<i>j-raṃ</i> 𑖑 𑖑
ñ-c	(<i>si</i>) <i>ñ-ca</i> 𑖑 𑖑 ¹⁷					(<i>sa</i>) <i>ñ-co</i> 散祖	

¹⁰ 沒 in 沒駄, *buddha*, and 沒 in 沒地, *buddhi*.

¹¹ I wonder if there is any rule to distinguish the two characters, i.e. 摩 and 麼: 摩賀, i.e. *mahā-*; 三摩野, i.e. *-samaya-*; 麼拏, i.e. *maṇi-*; 娑麼𑖑娑摩, i.e. *-samam sama-*; 娑麼𑖑囉, i.e. *smara-*; 麼麼, i.e. *mama-*; 三麼𑖑濕𑖑娑, i.e. *samāśvāsa-*. This is true to all the four versions, *D*, *A*, *B* and *Z*.

¹² 蜜 of 阿蜜哩𑖑𑖑, i.e. *amṛta-*; it may well be mixed up with *amita-*: 阿蜜多!?

¹³ 欲 and 庚 of 阿欲 and 阿庚 respectively: *āyus-*, *āyuh*. Both 欲 and 庚 are used in *B* & *D*, but only 欲 in *A* & *Z*. 庚 of 阿庚 may well be a scribal mistake for 𑖑; cf. *Text D* n. 8!

¹⁴ 𑖑, *śud-*, of 𑖑弟, i.e. *śud-dhe*.

¹⁵ 𑖑 of 𑖑𑖑駄野, and 尾𑖑𑖑駄野 i.e. *śodhaya* and *viśodhaya*.

¹⁶ It is to be noted that 𑖑 is used for the Indic original prefix *sam-* in transliteration, and furthermore particularly when followed by the labial, mostly *m-*, at least in Chinese character, i.e. 三摩野, *sam-aya-*; 三滿𑖑 and 三𑖑𑖑, *sam-anta-*; but 三麼𑖑濕𑖑娑, *sam-āśvāsa-*. These phenomena must be universal in other Buddhist texts, e.g. 三摩地/提 (三昧耶, 三昧), *sam-ā-dhi-*; 三眉底與, 三彌底 (*Sammitīya-*), *Sam-matīya-* (<*sam-man-*), 三藐三佛陀, *samyak-saṃbuddha-* (*sam-y-añc-*).

¹⁷ 𑖑 of 阿𑖑鼻𑖑左觀, i.e. *abhiñcātu* (VI *si-*: *si-ñ-c-*).

t-p	<i>t-pa</i> 吒播 _{二合}						
t-r					<i>t-rai</i> 袒賴 _{二合}		
t-v	<i>(sa)t-t-va</i> (薩)袒嘯 _{二合}						
d-dh	<i>(bu)d-dba</i> 沒駄	<i>(bu)d-dbi</i> 沒地		<i>(su)d-dbe</i> 穉第			
d-y	<i>d-ya</i> 你也 _{二合}						
d-r		<i>d-ri</i> 捺哩 _{二合}					
d-dh-y	<i>(bu)d-dh-ya</i> 沒地野 _{二合}						
n-t	<i>(ma)n-ta</i> 滿夥 舅夥		<i>(ya)n-tu</i> 琰覩				
n-dh	<i>(sa)m/n-dba</i> 散駄						
p-r	<i>p-ra</i> 鉢囉 _{二合}						
r-g	<i>(du)r-ga</i> 訥樂 _{二合}						
r-t	<i>r-ta</i> 囉多 _{二合}						
r-bh				<i>r-bbe</i> 囉陸 _{二合}			
r-v	<i>(sa)r-va</i> 薩囉						
ś-c	<i>ś-ca</i> 室者 _{二合}						
ś-m		<i>ś-mi</i> 濕茗 _{二合}					
ś-v	<i>ś-va</i> 濕囉 _{二合}						
ṣ-ṭ	<i>ṣ-ta</i> 瑟吒 _{二合}						
ṣ-ṭh	<i>ṣ-tba</i> 瑟吒	<i>ṣ-tbi</i> 瑟毗 _{二合} ¹⁸					
ṣ-ṇ		<i>ṣ-ṇi</i> 瑟泥 _{二合}					
s-ph	<i>s-pha</i> <娑>頗 _{二合}		<i>s-phu</i> 娑普 _{二合}				
s-m	<i>s-ma</i> 娑麼 _{二合}						
s-r	<i>s-ra</i> 娑囉 _{二合}						
s-v	<i>s-va</i> 娑囉 _{二合}						

¹⁸ 毗, used only in the consonant cluster 瑟毗; cf. Z 毗, a popularized form of 毗; also *Text Z* Table, n. 6!

II-A.

不空・佛頂尊勝陀羅尼注義・校合*

The *Uṣṇīṣa-Vijayā Dbāraṇī* Annotated by Amoghavajra
Text Presented with Transliteration

(Z.672b.-7/T.388b.9) 佛頂尊勝陀羅尼注義

(Z.-6/T.10) 大興善寺三藏沙門大廣智 (T.11) 不空奉 詔譯

(Z.-5/T.12) 曩謨婆上識囉帝¹ 怛囉² 路枳也³ 三世亦³

namo bhagavate trai-lokya-

(T.13) 鉢囉(Z.-4) 底尾始瑟吒¹ 野² 沒駄² 野² 婆識囉帝² (T.14) 婆識囉帝
prativīṣṭāya buddhāya bhagavate(Z.-3) 怛你也他³ 亦即說³ 囉³ 亦云一切法本不生(T.15)亦云³ 藏亦云如來無見頂相也

* At the end of this text (abbreviated as Z hereinafter) it says that the text translated (i.e. transliterated) is Sinic in parallel with Indic including comments upon phrases: 如上所譯 店梵敵對 顯句標釋 (Taisho 974D: XIX p. 388c17). This may mean that the original version may have had the Indic text followed by Chinese transliteration in parallel to every line, like e.g. Taisho No. 973: XIX p. 372a28-373a29, or exactly T No. 974B: XIX p. 384b22-385c18; but unlike T No. 973: XIX p. 377a1-b6 (text in Chinese characters), followed by 377b7-c8 (text in Siddham).

— Hereunder I will try to transliterate the text from the readings in Chinese characters without inserting missing signs, such numerous examples as long vowels, i.e. 引, or for consonant clusters, i.e. 合; e.g. 路枳也 合, i.e. °lokyā, 曩謨婆上, i.e. °vabhāsa; 怛他 合, 囉多 合, 地瑟吒 合, 囉多 合, i.e. tatbhāgatādbiṣṭhānādbiṣṭhita-. Cf. also I-A: Text D fn.*!

¹ 吒 is used for both *ta* and *tba* in all the versions of this text (with no variant reading). Only one exceptional case of the character 吒 for 吒 is found, i.e. T XIX 372b2: 吒 of 鉢囉 底尾始瑟吒 合, i.e. prativīṣṭāya. Furthermore, D uses 吒 for both *ta* and *tba*, but 吒 only for *ta*!

² So Z: 野殊勝, but D: 最 (of 最殊勝)

³ Read 怛你也 合, i.e. tad-yathā. 你 here could be “di”, as 你 in 敬祖你帝, i.e. samcodite, as if 你也 of 怛你也他 合 did not sound “dya”, but “dya” with an epenthetic -i- to the ears of the copyist/scribe. It may be less probable to see a phonological change of *d* and *n*, which may have meant -n- of a neuter pronoun *tad-*, *tan*, **tan*? Furthermore, either 你 or 爾, used for 你 *ni*, may be correct in: 鉢囉 底尾始瑟吒多也 (so Z, but 爾 for *ni* in D: 鉢囉 底尾始瑟吒多也 野), i.e. prativartaya, as long as it stands on the pronunciation at the time when it was copied. Then, it means that the latter represents an early Middle Chinese sound. This question is in actual fact much more complicated: cf. e.g. Edwin G. Pulleyblank, *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin* (Vancouver 1991), p. 223f, *n*: 你, *ēr*: 爾, ss.vv.

Cf. also Heinemann, *op.cit.*, p. 34 怛爾也他, and p. 33 怛姪他! These two are attested in the extant texts, see e.g. 怛爾也 合, T XIX 367a-3, 384b-2/-1 (with *tad-yathā* in Siddham),

tad-yathā om

(Z.-2) 尾戌駄也^除 尾戌駄也娑摩娑 (T.16) 摩⁴三滿多^上 嚩娑娑
viśodbhaya viśodbhaya sama-sama-samantāvabhāsa-

(Z.-1) 普遍 娑頗^{二合} 囉拏^{六聲} 囉 (T.17) 底⁵ 誡訶曩^{六聲} 娑嚩^{三合} 婆去 (Z.673a1) 嚩
spbarāṇa-gati-gabana-svabhāva-

尾舜^入 弟^{自性} 阿^上 (T.18) 毗洗者觀^{灌頂} 銘^我 素嚩多^善 嚩 (Z.2) 囉
viśuddhe abhiṣīcatu mām sugata-vara-

嚩者曩^{引殊勝} (T.19) 教 阿蜜哩^{二合} 多去 毗灑^六 闍^{甘露灌頂} 亦云不死 (Z.3) 句灌頂露者^{法身解脫}

387b14, c-6; 怛儻野^令 他^引 T XIX 383c7, 怛唎他: T XIX 362c1 (v.l. 姪), 怛姪佗 (with *tad-yathā* in Siddham): T XIX 372b3/4. I wonder if this 怛姪他 is to read 怛姪也他. 姪 here is certainly for 你 or 儻; cf. e.g. Chou, *op.cit.*, Nos. 1631-1632 (姪), Karlgren, *op.cit.*, No. 413o/p (姪).

⁴ 娑摩娑摩, i.e. *sama-sama-*: some versions read *sama-* twice in this way, but some others do not repeat *sama-*. D suggests a reading: *samaṃ sama-samant*°, “equally equal ...”. However, Fa-tien (法天) reads: 阿娑麼娑麼 (T XIX 383c10), i.e. *a-sama-sama-*°, “incomparably equal”. This very reading is also found in the Fan-shan (房山石刻) version transliterated by Tz’ü-hsien (慈賢); for details see Yuyama 1997. It is further noteworthy that this specific phrase, *a-sama-sama-*°, is found in the inscription in six scripts on the wall at the Chü-yung-kuan (居庸關), carved most probably in 1345, and on the bronze bell at the Temple Yeon-bog-sa (演福寺) of Gae-seong (開城), capital city of the Koryō dynasty (高麗朝), cast by imperial order of King Ch’ung-mok-wang (忠穆王) in 1346. This must exactly be the imperially authorized version of the Yüan dynasty (元朝); cf. *supra* I, §1.1; further Yuyama 1985 & 1997.

⁵ 嚩 of 嚩底 may well be for 嚩 (諸橋轍次·大漢和辭典·修訂版, 1984-86: Vol. IX p. 1025c: No. 32478): i.e. *ga-* of *gati-*, while CBETA may read something different: “?[(薩 — 文 + (立 —))/木]”. It may be explained by the interchange of the radical 卩 (邑偏) = 阜, or 阜 minus 丨 (within the character).

⁶ Originally, this should have made a *sandhi* without the following sound 阿: *a-* of 阿蜜哩^{三合} 多大^引 毗^上: *amṛtābbi*°, i.e. °-*vacanāmrta*°. Cf. D: 阿蜜哩^{三合} 多大^引 鼻^上: *amṛtābbi*°, i.e. °-*vacanāmrta*°. Further confusion here is the opposite case, i.e. contrary to the preceding liaison, there should have been made a *sandhi* with a long-vowel sign after 多大 (D: 哆): i.e. 阿蜜哩^{三合} 多大^引 (D: 哆) 毗灑闍 (D: 鼻嚩闍): i.e. *amṛtābbiṣekai*<*h*>!

毗灑闍, so Z, i.e. °*bbiṣekai*(*h*): cf. D 闍 (of 鼻嚩闍), written probably for 闍. CBETA does not analyze the character here (with a question mark alone). In this connection further reference can be made to other source texts, e.g. T XIX 362c5: 阿蜜嚩多^{三合} 鼻嚩闍, i.e. both *amṛtābbiṣekai*(*h*); T 372b13/14-15/16: *amṛtābbiṣekai*<*h*> (in Siddham) / 阿謎嚩多^{三合} 鼻嚩闍; T 377b11-12: *amṛtābbiṣekai*<*h*> (in Siddham); T 383c14-15 (法天): 蜜嚩^{三合} 鼻嚩闍, i.e. °*mṛtābbiṣekai*(*h*); T 384c11/12-13/14: *amṛtābbiṣekai*<*h*> (in Siddham) / 阿蜜嚩多^{三合} 鼻嚩闍; T 387b18-19: 阿蜜嚩多^{三合} 鼻嚩闍^或 闍^又 鼻嚩闍^又, i.e. *amṛtābbiṣekai**h*. It may be expected to read with a word following it as in A (T XIX 384c9/11/13-12/14/16: both in Chinese and Siddham): *abhiṣīcatu mām sugata-vara-vacana-amṛtābbiṣekai*<*h*> (missing *sarva-tatbāgatā*<*h*>)

vacanā-amṛtābbiṣekai<h>

(T.20) 阿^引訶囉阿訶囉^{云唯願攝受唯垂授攝} (Z.4) 阿欲散 (T.21) 駄^引囉拏^{任持}
ābāra ābāra āyuh-saṃdhārāṇi

戍駄也戍駄也^{清淨} 誡誡曩 (Z.5) 尾戍⁷ (T.22) 第^{如虛空} 鄔瑟膩^{二合} 沙尾惹也
śodbaya śodbaya gagana-viśuddhe uṣṇīṣa-vijaya-

尾舜^人第^{佛頂} 娑訶娑囉^{二合} 囉濕弭^{二合} 散祖你帝^覺 (T.24) 薩^囉
viśuddhe sahasra-raśmi-saṃcodite sarva-

怛 (Z.7) 他^引藥多⁸ 地瑟吒^{二合} 曩^引 地瑟耻^{二合} 多 (T.25) 一切如來^神 力所加持
tathāgatādbiṣṭhānādbiṣṭhita-

(Z.8) 摩訶母捺哩^{二合}⁹ 印契若廣釋身印語印^{心印金剛印如理} (T.26) 趣般若說 嚩日囉^{二合} (Z.9) 迦也
mabā-mudri vajra-kāya-

僧訶多^上曩尾舜第^{金剛鉤鎖} (T.27) 薩^囉 嚩囉拏 (Z.10) 播野訥藥底¹⁰
saṃbatana-viśuddhe sarvāvaraṇāpaya-durgati-

跋哩尾舜第¹¹ (T.28) 一切諸淨一切障者所謂^{業障報障煩惱障皆得清} (Z.11) 淨也 鉢羅^{二合} 底你靺多 (T.29) 也
pariśuddhe pratinivartaya

*mabā-mantra-pada*i<h> (missing *mudrā*-); Y 30-42: *abhiṣācantu mām sarva-tathāgatāḥ sugata-vara-vacanāṃṛtābbiṣekair mabā-mudrā-mantra-pada*iḥ.

⁷ This single use of the character 戍 for *śu*(d) may simply be a scribal mistake for 舜 in Z!

⁸ Most probably due to the scribal confusion with a similar wording, here is a missing passage, i.e. (a)*valokani śaṭ-pāramitā-paripūrāṇi sarva-tathāgata-bhṛdaya-*, which is to be found in D 45-53: 嚩路迦賴沙吒播^{二合} 囉弭哆^{二合} 跋哩布^{二合} 囉拏薩囉^{二合} 但^{二合} 誡多^{二合} 捺哩^{二合} 鄔野^{二合}.

⁹ 摩訶母捺哩^{二合}, i.e. *mabā-mudri*, may well be correct, as other examples shown in varied characters suggest, e.g. T XIX 367b8-9: 祇捺囉^{二合}, b27: 摩賀^{二合} 敵捺囉^{二合}, 373a27/29: 摩訶母姪囉^{二合}; 372c4: 摩訶母姪梨; 384a5-6: 母捺囉^{二合}, 母捺囉^{二合}, 摩賀母捺囉^{二合}; b11-12: 母捺囉^{二合}, 摩賀^{二合} 母捺囉^{二合} (with a wrong 囉 *ra*!), 385a4: 摩賀母捺囉^{二合}, but c16: 摩賀^{二合} 母捺哩^{二合}! 387b29: 摩賀^{二合} 母捺囉^{二合}. However, a few texts may intend a reading *mudre*, e.g. T XIX 37717-18: *mabā-mudre* (Siddham); Y (Gae-seong): °*mudre* (in *Lañ-tsha*)! Cf. but *infra* 摩訶母想囉, cum n. 23, also 15!

¹⁰ 訥藥底 of 薩^囉 嚩囉拏播野訥藥底, i.e. *sarvāvaraṇāpaya-durgati-*, seems to be missing in some versions of this text. Cf. T XIX 387c1-2: 薩^囉 嚩囉拏^{二合} (29) 波耶突囉^{二合} 揭底 (read: °突囉揭^{二合} 底): *sarvāvaraṇāpaya-durgati*. Cf. D 63: 訥藥^{二合} 底.

¹¹ 跋哩尾舜第, *pariśuddhe*, with another example below, may perhaps be better corrected to either 跋哩舜第 or 尾舜^人第, i.e. *pariśuddhe* or *viśuddhe*.

阿欲舜^{入第}壽命增長^{皆得清淨}三麼 (Z.12) 耶地瑟耻^{二合}帝^{12 (T.388c1) 留顯 加持}
āyuh-suddhe samayādbiṣṭbite

麼拏麼拏摩訶麼拏^{世實法寶所 (Z.13) 三種 寶權}怛他 (T.2) 多步多句致
maṇi maṇi mahā-maṇi tatbatā-bbūta-koṭi-

跋哩舜^{入第}眞如實源^{滿滿清淨}尾薩 (Z.14) 普^{內合}13 (T.3) 吒沒地舜^{入第}顯現智^{慧清淨}惹也
parisuddhe visphuṭa-buddhi-sudhe jaya

惹也^{最勝最勝 眞信二諦}尾 (Z.15) 惹 (T.4) 也尾惹也^{昧勝勝 悲 智二門}14 娑麼^{二合}囉
jaya vijaya vijaya smara

娑麼^{二合}囉^{念待 (r. 持) (T.5) 定 慧根 (r. 相應)} (Z.16) 薩嚩沒駄^引地瑟耻^{二合}多舜^{入第}入而佛加^{持清淨}
smara sarva-buddhādbiṣṭbīta-suddhe

嚩日^{二合}15 (Z.17) 菩提心堅固^{如余剛也}嚩日^{二合}囉^{二合}藥陛^{16 證金 剛藏}嚩日^{二合}17
vajri vajra-garbhe vajram

娑嚩^{顯成 (Z.18) 金剛}覩¹⁸麼麼^{或義或爲他念 誦稱彼名字}設哩嚩薩嚩 (T.8) 薩怛嚩^{二合}難^{(Z.673b1) 引}

¹² 三麼耶地瑟耻^{二合}帝, *samayādbiṣṭbite*, should perhaps be emended to 三麼耶地瑟吒^{二合}引^引地瑟耻^{二合}帝, i.e. *samayādbiṣṭhānādbiṣṭbite*. Cf. e.g. *supra* 怛他^引嚩多^引地瑟吒^{二合}引^引地瑟耻^{二合}多, i.e. *tathāgatādbiṣṭhānādbiṣṭbīta*! But cf. also *infra* 薩嚩沒駄^引地瑟耻^{二合}多, *sarva-buddhādbiṣṭbīta*-, which may also be emended to 薩嚩沒駄^引地瑟吒^{二合}引^引地瑟耻^{二合}多, *sarva-buddhādbiṣṭhānādbiṣṭbīta*!

¹³ This word 尾薩普^{內合}13 should be nothing but *visphuṭa*-, i.e. 尾薩普^{內合}吒. The editor expresses his doubt about it: 六疑二. I wonder why the scribe had made a mistake 六 for 二, i.e. 二合, which simply makes it read: *visphuṭa*-.

¹⁴ In the note the editor suggests a correction: 昧勝勝疑殊勝殊勝. I am not sure if this emendation is acceptable. Needless to say, the meaning here is quite clear (cf. *Index*, s.v.)!

¹⁵ 嚩日囉^{二合}, i.e. *vajri*, which may not be *vajre* (as in Y 141, 142, 159; cf. also Y 160: *vajriṇi*). One may compare it with D: 嚩日哩, i.e. *vajri* and also with a variously written *ri* of *mudrī*: see further *supra* n. 9! Cf. otherwise 隸 in Karlgren, *op.cit.*, No. 1241m, Chou, *op.cit.*, No. 10690, Pulleyblank, *op.cit.*, p. 189, s.v.! Thus, it may be explained as a vocative form of **vajrī*-, as compared with *vajriṇi*, voc. of *vajriṇī*-, fem. Cf. also Heinemann, *op.cit.*, p. 133: 縛日哩, 縛日哩拏: *vajri*, *vajriṇi*. Cf. however Heinemann, *op.cit.*, p. 154: 嚩日隸, *vajre*, voc.sg. of *vajrā*!

¹⁶ 藥 of 藥陛 may have had a final consonant of -t/-r, but may well be corrected to 藥囉陛 (so D), i.e. *garbhe*. Cf. Z Table, n. 3!

¹⁷ Cf. D: 嚩日囉^{二合}, nom.sg.nt. of *vajra*-, as a predicate. Cf. also Heinemann, *op.cit.*, p. 133: 縛日藍, *vajrāṇi*, acc.sg. of *vajrā*! Cf. Text D n. 13!

¹⁸ This 覩 must come after 娑嚩, which read: 娑嚩覩^{顯成 金剛}, *bhavatu*, 3.imper.sg. It is not a 2.imper.sg., but it goes with the subject *sarīram*, nom.sg.! Cf. Text D 94: *bhavatu*, also Text D n. 13, also Taisho 974B: XIX 385b20/22: 娑去^引浮覩^{顯成 金剛} (Text B n. 11)!

bbavatu mama śarīraṃ sarva-satvānāṃ

者迦也尾舜弟^{一切有情}薩^(T.9)嚩^{身清淨}底波哩尾舜弟¹⁹ (Z.2)^趣薩^{皆清淨}嚩^{怛他}
ca kāya-viśuddhe sarva-gati-pariśuddhe sarva-tathā-

嚩^多三^{麼濕} (T.10) 嚩^合娑^{地瑟耻}帝^帝 (Z.3)^{如來安慰}沒^命棘^命 (T.11) 棘^合
gata-samāśvāsādbhiṣṭite budhya budhya

冒^{馱也} (合) 馱^{能覺} (20) 舜^第 (Z.4)^{清淨}薩^嚩嚩^{怛他} (T.12)^引 嚩^多引^{地瑟} <吒>²¹ (二合) <引>^曩
bodbaya śuddhe sarva-tathāgatādbhiṣṭita-nā-

地瑟耻^{二合}多²² (Z.5)^{如來神}摩^訶母^怛嚩^嚩 (T.13) 嚩^嚩 (二合) 大印所謂大印由入毗盧遮那曼荼羅受灌頂已後
dhiṣṭita-mahā-mudrī

(Z.6) 灌頂師受得本尊灌頂三 (T.14) 摩地觀智一念淨心瑜伽相應行者別尊心等同毘盧遮那及諸菩薩能現入相成 (Z.7) 道速證菩提若智也

娑^嚩 (T.14) 訶^者涅槃義。所謂四涅槃。一自性清 (Z.8) 淨涅槃。 (T.15) 二有餘依涅槃。
svābhā

三無餘依涅槃。四無住處涅槃 (Z.9/T.16) 槃。如上所譯。唐梵敵對。顯句標釋

(Z.10/T.17) 寶永二年^西冬十二月十三日以如來藏 (T.18) 本書 (Z.11) 寫竟

兜率谷雞頭院闍梨嚴覺

(Z.12/T.19) 享保三歲戊戌九月令得忍寫校正了

(T.20) 慈泉

(Z.13/T.21) 文政六年癸未六月以東叡山真如院本令 (T.22) 他寫 (Z.14) 自校之了 龍肝

¹⁹ Cf. *supra* n. 11!

²⁰ 冒馱也 here should have been repeated as commented clearly: 令悟能覺 令悟能覺, i.e. 冒馱也 冒馱也 *bodbaya bodbaya*, so in D115-116 冒馱野 冒馱野!

²¹ Cf. *supra* n. 1!

²² Cf. *supra* n. 12!

²³ 怛 may have to be emended to 捺, as it is normally used for *ta-*. For 怛 “*ta*” is probably a scribal mistake for 捺 “*da*”, as proven in this phrase seen above (cf. *supra* n. 9!): 摩訶母捺哩^合, i.e. *mahā-mudrī*; cf. also D: 摩賀母捺哩^合, i.e. *mahā-mudrī*, and further 『加句靈驗佛頂尊勝陀羅尼』, 摩賀母捺哩^合 (T XIX 387c7), i.e. *mahā-mudrī* (read probably °*mudrī*, and not °*mudrī*!). Otherwise, it must possibly be °*mātar*, voc., or °*mātari*, loc., “Prajñāpāramitā, Mother of All the Buddhas Tathāgatas”, and less possibly °*mantra*, °*maṇḍara*? Note also that Amoghavajra comments: 大印由入毘盧遮那曼荼羅! Cf. further *supra* n. 9, also 15!

II-B.

不空・佛頂尊勝陀羅尼注義・原典再構

The *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* Annotated by Amoghavajra
Text Reconstructed*namo bhagavate // trai-lokya-prativīṣṭāya buddhāya bhagavate //*

(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)

tad-yathā / / om / viśodbhaya viśodbhaya //

(8) (9) (10) (11) (12)

sama-sama-samantāvabhāsa-spharaṇa-gati-gaḥana-svabhāva-viśuddhe /

(13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21)

abhiśīcatu māṇi sugata-vara-vacanā-amṛtābhiṣekaiḥ //

(22) (23) (24) (25) (26) (27) (28)

āhara āhara // āyuh-saṃdhāraṇi śodbhaya śodbhaya //

(29) (30) (31) (32) (33) (34)

gagana-viśuddhe / uṣṇīṣa-vijaya-viśuddhe //

(35) (36) (37) (38) (39)

sahasra-raśmi-saṃcodite / sarva-tathāgatādhiṣṭhānādhiṣṭhita-mahā-mudri / vajra-

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

kāya-saṃhatana-viśuddhe //

(50) (51) (52)

sarvāvaranāpaya-durgati-pariśuddhe // pratinivartaya // āyuh-śuddhe

(53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60)

samayādhiṣṭhite / maṇi maṇi mahā-maṇi / tatbatā-bhūta-koṭi-pariśuddhe //

(61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70)

viśpṛṣṭa-buddhi-śuddhe //

(71) (72) (73)

jaya jaya vijaya vijaya / smara smara / sarva-buddhādhiṣṭhita-śuddhe //

(74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83)

vajri vajra-garbhe / vajraṃ bhavatu mama sarīraṇi sarva-satvānāṃ ca // kāya-viśuddhe //

(84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95)

sarva-gati-pariśuddhe //

(96) (97) (98)

sarva-tathāgata-samāśvāsādhiṣṭhite / budhya budhya bodhaya / śuddhe //

(99) (100) (101) (102) (103) (104) (105) (106)

sarva-tathāgatādhiṣṭhānādhiṣṭhita-mahā-mudri /

(107) (108) (109) (110) (111) (112)

// svāhā //

(113)

II-C.

不空·佛頂尊勝陀羅尼注義·字母表

The *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* Annotated by Amoghavajra
A Table of Phonetic Alphabet

1. Basic Letters:

	a	i	u	ṛ	e*	ai*	o*
a	阿		鄔	哩 ¹			
k	迦					𑖀 ²	句
g	𑖀𑖩 ³						
c	者						祖
j	惹						
t	吒 ⁴	致					
ṭh	吒 ⁵	(耻) ⁶					
ṇ	𑖀	𑖀 ⁸ 𑖀 ⁷					
t	𑖀 多 ⁸	底	𑖀		帝		
ṭh	他						
d	(𑖀) ⁹	你 ¹⁰	𑖀 ¹¹				
dh	𑖀	地			弟 弟		
n	𑖀	你 ¹²					
p	播 𑖀		普				
ph	頗						
b			沒 ¹³				冒
bh	婆(𑖀)	毗	步		陛		

¹ Cf. *Text D: Table*, fn. 1!² 𑖀 of 毗𑖀𑖀, i.e. °bbiṣekai(h). Cf. *D: 𑖀* of 鼻𑖀𑖀, i.e. °bbiṣekai(h); also *Text Z* n. 6!³ 𑖀 of 𑖀底, 𑖀𑖀多, 𑖀他𑖀𑖀多, 𑖀𑖀底, i.e. *gati-, sugata-, tatbāgata-, durgati-*; cf. 𑖀𑖀𑖀𑖀: i.e. *vajra-garbha*: 金剛藏; but *D 𑖀𑖀𑖀* may well be a correct reading. Cf. *Text Z* n. 5, also *Text D: Table*, fn. 3!⁴ 吒 of 尾薩普^[A] 吒, *visphṭa-*, of 鉢囉 𑖀底尾始瑟吒 𑖀𑖀, i.e. *prativīśiṣṭāya* (cf. next note 6!). Note that 𑖀 in *D* is used for both *ṭa* and *ṭha*, and 吒 only for *ṭa*! Cf. also *Text Z* n. 1!⁵ 吒 of 𑖀他𑖀𑖀多地瑟吒 𑖀𑖀, 𑖀地瑟耻 𑖀多, i.e. *tatbāgatādhivīśiṣṭhānādhīṣṭhita*, Cf. prec. note 4! Cf. also *D: 𑖀* of 尾始瑟吒 𑖀, i.e. °vīśiṣṭa-; further *Text Z* n. 1!⁶ 耻 is simply a popularized form for 𑖀; cf. *infra* n. 31!⁷ 𑖀 of 𑖀𑖀𑖀 𑖀沙, i.e. *uṣṇīṣa*, and 𑖀 of 𑖀𑖀, i.e. *maṇi* and of 𑖀𑖀𑖀, i.e. *saṃdhāraṇi*.⁸ In addition to *Z* 𑖀 and 多, *D* offers two more characters, i.e. 𑖀𑖀.⁹ 𑖀 of 母𑖀 𑖀, i.e. *mudri*, may well be a scribal mistake, and should perhaps be emended to 母𑖀 𑖀 *mudri*. Cf. *Text Z* n. 9, 15 & 23!¹⁰ Cf. *Text Z*, n. 3, and *infra* n. 12!¹¹ 𑖀 of 𑖀𑖀𑖀底: *durgati*.¹² 鉢囉 𑖀底你𑖀多也, i.e. *pratinivartaya*. Cf. *Text Z*, n. 3 on 你 of 𑖀你𑖀也他, i.e. *tad-yathā*!¹³ 沒 of 沒𑖀/沒地/沒𑖀, i.e. *buddha, buddhi, budh-ya* (poss. for *buddhya*).

m	摩	弭	母	蜜哩 ¹⁴			
y	也 野 𦵏		欲 ¹⁵				
r	囉					𦵏	
l							路
v	𦵏 𦵏 ¹⁶	尾					
ś	設	始	戍 舜 ¹⁷				戍
ṣ	沙 ¹⁸				灑		
s	娑 ¹⁹ 薩 ²⁰ 𦵏 ²¹		素				
h	訶						

2. Nasals / Anusvāra / Visarga:

	am / āṃ / an / āṇ				i-		om
m	滿 ²² , 𦵏 ²³ , 𦵏 ²⁴ , 𦵏 ²⁵ , 𦵏 ²⁶ , 難 ²⁷ , 𦵏 ²⁸				𦵏 sin/siṇ		𦵏 𦵏
ṇ			欲 ¹⁷ yuḥ				

3. Consonant Clusters (with or without a sign of compound characters 𦵏):

	a	i	u	e	ai	o	am
k-y	k-ya 𦵏也						
j-r	j-ra 𦵏囉	j-ri 𦵏囉					j-ram 𦵏囉
ñ-c	(si)ñ-ca 𦵏者					(sa)ñ-co 𦵏祖	
t-r					t-rai 𦵏囉		

¹⁴ 蜜哩 𦵏 of 阿蜜哩 𦵏 𦵏¹⁴, i.e. amṛta / 甘露; it may well be mixed up with amita-, i.e. 阿蜜多!?

¹⁵ 欲 of 阿欲, i.e. āyuh.

¹⁶ 𦵏 of 𦵏多, i.e. varta-, in: 𦵏羅 𦵏 𦵏你𦵏多也, i.e. pratinivartaya.

¹⁷ 舜 of 舜第 or 舜弟, i.e. śuḍ-dbe. Cf. D: 𦵏第, i.e. śuddhe. Furthermore, Z may have mixed it up with 戍 in 𦵏𦵏𦵏尾戍第 𦵏𦵏 gagana-viśuddhe! This single use of the character 戍 for śu(d) may simply be a scribal mistake for 舜 śu(d).

¹⁸ 沙 of 𦵏𦵏𦵏 𦵏沙, i.e. uṣṇīṣa. In general, it may represent a sound śa!?

¹⁹ 娑 of 娑摩, i.e. sama; cf. 娑 of 娑麼 𦵏囉, i.e. smara. Cf. also next n. 21!

²⁰ 薩 of 薩𦵏, i.e. sar/sav-/sab-va, 薩𦵏𦵏 𦵏難²¹, i.e. sat-tvānām. Cf. 薩𦵏𦵏, i.e. sphuṭa-.

²¹ 𦵏 of 三滿多²², 𦵏麼耶, i.e. sa- of samanta-, samaya-; cf. Text D: Table, n. 16!

²² 滿 of 三滿多²², i.e. samanta.

²³ 𦵏 of 𦵏日𦵏, i.e. vajram.

²⁴ 𦵏 of 設哩𦵏, i.e. śarīraṇi.

²⁵ 𦵏 of 𦵏𦵏𦵏𦵏, i.e. sambhāraṇi, i.e. san-.

²⁶ 𦵏 of 𦵏𦵏𦵏𦵏, i.e. samḥatana-, i.e. saṇ-.

²⁷ 難 of 薩𦵏𦵏 𦵏難²¹, i.e. sattvānām.

²⁸ 𦵏 = māṃ / “我”.

t-v	(sa)t-t-va 薩怛囉						
d-dh	(bu)d-dha 沒駄	(bu)d-dhi 沒地		(su)d-dhe 舜成 ¹⁹ ・弟第			
d-y	d-ya 你也 ²⁹						
d-r		d-ri 捺哩/怛囉 ³⁰					
dh-y	(bud)dh-ya 沒𪛗						
n-t	(ma)n-ta 滿多						
n-dh	(sa)n/n-dha 散駄						
p-r	p-ra 鉢囉/鉢羅						
r-g	(du)r-ga 訥𪛗						
r-t	(va)r-ta 𪛗多						
r-bh				(ga)r-bhe 𪛗陸			
r-v	(sa)r-va 薩囉						
ś-m		ś-mi 濕𪛗 ³¹					
ś-v	ś-va 濕囉						
ś-ṭ	ś-ṭa 瑟吒						
ś-ṭh	ś-ṭha 瑟吒	ś-ṭhi 瑟𪛗 ³¹					
ś-ṇ		ś-ṇī 瑟膩					
s-ph	s-pḥa 娑頗		s-pḥu 薩普 ³²				
s-m	s-ma 娑麼						
s-r	s-ra 娑囉 ³¹						
s-v	s-va 娑囉						

²⁹ Cf. Text Z, n. 3 on 你 of 怛你也他, i.e. tad-yathā!

³⁰ Cf. Text Z n. 9 & 23!

³¹ 𪛗 of 怛他𪛗多地瑟𪛗, 𪛗𪛗地瑟𪛗³¹多, i.e. tathāgatādvivīṣṭhānādhiṣṭhita, 三麼耶地瑟𪛗³¹帝, i.e. samayādhiṣṭhite, 薩囉沒𪛗地瑟𪛗³¹多, i.e. sarva-buddhādhiṣṭhita, 三麼濕囉³¹娑地瑟𪛗³¹帝, i.e. samāsvāsādhiṣṭhite, 薩囉怛他𪛗多³¹地瑟𪛗³¹多, i.e. sarva-tathāgatādhiṣṭhita. As mentioned above, 𪛗 is simply a popularized form for 𪛗; cf. supra n. 6 & Text D Table n. 18!

³² As is noted in Z (also in T XIX 388c2, fn. 5), 六 “six” must be a simple mistake for 二 “two”, i.e. 二合: 尾薩普³²𪛗, i.e. viśphuṭa-. Cf. Text Z n. 13!

III-A.

不空・佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法中之
佛頂尊勝陀羅尼・校合

Amoghavajra's *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* in his *Vidhi*.*
Text Presented with Transliteration

(.25) 曩^引 暮^引 婆^引 誡^引 囉^引 帝^一 怛^引 囉^二 路^引 枳^引 也^二 (26) 鉢^引 囉^二 底^一 以^三 尾^三 始^三 瑟^二 吒^二 也^四
namo bhāgavate trai-lokya-prativiśiṣṭāya

勃^引 駄^引 耶^(.27) 婆^引 誡^引 囉^引 帝^六 怛^引 囉^二 也^二 他^引 叱^引 尾^八 成^(.28) 駄^引 也^九 三^一 麼^一 三^一 滿^一 多^一 囉^一 婆^一 娑^一
buddhāya bhāgavate tad-yathā oṃ viśodbhāya sama-samantāvabhāsa-

薩^二 頗^二 囉^(.29) 拏^一 壁^一 底^一 異^一 誡^一 賀^一 曩^一 薩^二 囉^二 婆^(b1) 去^一 囉^二 秣^二 輪^一 律^一 反^一 第^一 三^一
spbaraṇa-gati-gahana-svabhāva-suddhe

阿^一 鼻^一 誅^一 左^一 鈴^(.2) 素^一 誡^一 多^一 囉^一 囉^一 左^一 曩^一 蜜^一 囉^二 多^(.3) 鼻^五 囉^一 囉^一 阿^一 賀^一 囉^一
abhiśīcatu mām sugata-vara-vacanāṃrātābbiṣekai<ḥ> āhara

阿^一 賀^一 囉^一 阿^(.4) 欲^一 散^一 駄^一 囉^一 拏^一 成^一 駄^一 也^一 成^一 駄^一 也^(.5) 誡^一 誡^一 曩^一 尾^一 提^一
āhara āyuh-saṃdhārṇi śodbhaya śodbhaya gagana-viśuddhe

* 不空譯・佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法・一卷 (Taisho 972: XIX p. 364b-368a), in which is found an *Uṣṇīṣa-vijayā Dhāraṇī* Text: XIX 367a25-b25. — Numbering the words in the text is often confused or rather arbitrary. This is not always noted on every incorrect word by the Taisho editor(s), e.g. 薩囉薩怛囉 合 引 四 六 難 上 左, i.e. *sarva-sarvā¹⁶ nām ca*. Needless to say, the number 46 should come after 難, i.e. *°nām*, or even after 左, i.e. *ca*, in the way this text shows.

— It may also be noteworthy that the second version (= the so-called ㊟) used for collation in the Taisho Edition reads the same characters as in D (see e.g. *infra* n. 4). It is the manuscript copied in 1353 and kept at the Temple Hōjū-in of Kōyasan: 文和二年寫高野山寶壽院本 (T XIX p. 364, n. 8). — Hereunder I will try to transliterate the text from the readings in Chinese characters without making such notes.

¹ No refrain here, whereas D repeats 尾式駄野, i.e. *viśodbhaya*.

² 薩 (v.l. 娑) 囉 合 婆 去 囉 (with no v.l. for 囉), i.e. *srabhāva*, may simply be a misprint for 薩囉 合 婆 去 囉, i.e. *svabhāva²*.

³ Read possibly with a prefix 尾, i.e. 尾秣第, i.e. *°viśuddhe*; cf. D 尾秣律反第, Z 尾舜入弟; cf. *infra* n. 8!

⁴ Read most probably read 阿鼻誅左觀 (with ㊟: p. 367, n. 43), i.e. *abhiśīcatu*, as in D 阿鼻誅左觀; but cf. Z 阿叱誅者觀!

⁵ Cf. D 囉左曩阿蜜哩 合 多, i.e. *vacanā-amṛtā^o*.

婆轉觀^{四十} (18) 麼麼^{四十五} 某甲¹³ 薩轉薩恒^{四十六} 難上^左 (19) 迦上^也 尾^第 ^{四十} ¹⁴

bhavatu mama sarva-satvānām ca kāya-viśuddhe

薩轉壁底^{四十八} 跋哩⁽²⁰⁾ 祇^第 ^{四十九} 薩轉恒他^引 摩多^{五十五} ¹⁵ 三摩^引 (21) 濕轉^{二合} 娑^引

sarva-gati-pariśuddhe sarva-tathāgata-samāśvāsā-

地瑟恥^{二合} 帝^{五十} 勃^勃 ⁽²²⁾ ^{五十} 冒^引 駄^也 冒^引 駄^也 ^{五十} 三滿多跋哩^祇 ⁽²³⁾ ^{五十} ^四

dhiṣṭhite budhya bodhya bodhya samanta-pariśuddhe

薩轉恒他^引 摩多^{五十五} ¹⁶ 地瑟恥^{二合} 曩^引 ⁽²⁴⁾ ^{十六} 地瑟恥^{二合} 多^{五十} 摩賀^引 敵捺^{二合} 盧^{五十八}

sarva-tathāgatādhiṣṭhānādhiṣṭhita-mahā-mudri

(25) 娑轉^{二合} 賀^引 ^{五十九}

svāhā

¹³ Here misses A a word, which D reads as follows: 設哩囉, i.e. *śarīraṃ*. It may have to be added here, otherwise it goes with the following *kāya*-°, “body”: “... my (= 某甲, ‘of so-and-so’) body”!

¹⁴ Here misses A a prefix, which D reads as follows: 跋哩尾^祇第, i.e. *pariśuddhe*.

¹⁵ Here misses A a long passage, which D reads as follows: 室者^{二合} 銘三^{三合} 麼^引 濕轉^{二合} 娑^引 娑^引 觀^引 薩^引 恒他^引 摩多^{三合}, i.e. ° *ca me samāśvāsayaṃtu sarva-tathāgata-sa*°. This somewhat long lacuna must have occurred by the scribal confusion of a similar phrase. Cf. also *supra* n. 7!

¹⁶ Here misses A a word, which D reads as follows: 紇哩^{二合} 娜野^引, i.e. °-*brdayā*°. This is an interesting point to compare with Texts D & Z, i.e. D *sarva-tathāgata-brdayādhiṣṭhānādhiṣṭhita*-°, but Z *sarva-tathāgatādhiṣṭhānādhiṣṭhita*-°!

III-B.

傳空海所伝・佛頂尊勝陀羅尼・梵漢字雙書本

The *Uṣṇīṣa-Vijayā Dbāraṇī* in Siddhaṃ Script Attributed to Kūkai
Together with that in Chinese characters:*

Text Presented with Corrected Transliteration in Roman Script

(Page 384, column b, line 16) 佛頂尊勝陀羅尼

(17) ॐ नमो भगवते त्रै-लो(19)क्य-

(17) *siddhaṃ namo bhagavate trai-lo(19)kya-*

(18) 曩謨 婆伽縛帝 但路(20)枳也 亦云三界

प्रतिविशिष्टा बुद्धाय भगवते

prativiśiṣṭāya buddhāya bhagavate

鉢羅 底尾始瑟吒 野 沒駄野 婆伽縛帝 已上第一歸(24) 敬譯 秘文

(23) तदथा ॐ (col. c, line 1) विशोधय विशधय (read: विशो०)

tad-yathā om viśodbhaya viśodbhaya

但爾也 他所謂之義。 說之義 陀三身無見頂相 義。已上第二(p. 384c2) 影表法 身門 尾戌駄也尾戌駄也 淨

स(3)म-सम-समन्तावभस-(read: ०भास-)(5) स्फरण-गति-

sama-sama-samantāvabhāsa-spharāṇa-gati-

娑(4) 麼娑麼 三 滿路 縛婆薩 照曜 (6) 娑頗 羅 拏 經遍

गहान- (read: ०-गहन-)(7) स्वभाव-विशुद्धे

gabana-svabhāva-viśuddhe

識底識賀曩 縛 娑縛 婆 縛尾秣第 自然清淨。已上第三淨(10) 應門

(9) अभिषिंचतु मां सुगत-(11)वर-वचन-(read poss.: ०-वचना-०, or ०-वचनामृत० in sandhi with the following अ०) अमृताभि(13)षैकै (read: ०भिषेकै:)

abhiṣiṅcatu mām sugata-vara-vacana-amṛtābhiṣekai<ḥ>

阿鼻訖左靚 素識哆 縛羅縛左曩 阿蜜嚩 多鼻 麗闍

स(15)मयँधिष्टे (read: सयाधिष्टिते) मणि मणि (17) महा-मणि
samayādhiṣṭhite maṇi maṇi mahā-maṇi

三(16)麼野^引地瑟恥^二帝^{帝額}麼拏麼拏(18)摩賀麼拏^{世寶亦云法寶。所謂二種資糧。已上第六壽命增長門}

त(19)थता-भूत-कोटि-परिशुद्धे (21) विस्फुट-बुद्धि-शुद्धे
tathatā-bhūta-koṭi-pariśuddhe viśphuṭa-buddhi-śuddhe

恒(20)闍哆^{去引}部多句致跋哩秣^{真如實際(22)遍滿清淨}尾娑普^{三合}吒沒地秣^{顯現智惠清淨}第^{加持}

ज(23)य जय विजय विजय (25) स्मर
jaya jaya vijaya vijaya smara

惹(24)野惹野尾惹野尾惹野^{最勝最勝即是真俗二諦法門} (26)娑麼^{二合}羅

स्मर स(27)र्व-बुद्धा²
smara sarva-buddhā<dhiṣṭhita-śuddhe>

娑麼^{二合}羅^{念持定惠相應。已上第七相應門} 薩(28)摩^引沒駄^一切諸佛^{三合} <地瑟恥^二多秣^{加持}第^{清淨}>³

नमो विपश्चिने (read: विपश्चिने) तथा(29)गताय
namo vipaśyine tathā(29)gatāya

曩謨毘婆尸寧怛他(30)嚩多野^{敬禮毘婆尸如來}

नमो सिक्खिने तथा(col. b, l. 1)गताय
namo sikkhine tathā(385b1)gatāya

曩謨尸棄曩⁴ 怛他(385b2)嚩多野^{敬禮尸棄如來}

नमो विशभू (read prob.: विशभूवे or विशभूवे)⁵ तथा(3)गताय

² This is simply a scribal confusion affected by the following list of the names of the Buddhas. It should originally have been: सर्व-बुद्धाधिष्ठित-शुद्धे. This is attested by the words after the vocation to the Buddhas and Avalokiteśvara, although it looks as if the Avalokiteśvara Bodhisattva is combined with the following धिष्ठित-शुद्धे. It may hardly be an accusative. Little possible is a vocative? The textual comment “一切諸佛/all the Buddhas” offers no help to solve the question.

³ Cf. Text in Devanāgarī n. 2!

⁴ Read perhaps 尸棄寧, i.e. *sikkhine*, dat.sg.m., as in Siddham script, for 尸棄曩, i.e. *sikkhinā*!

⁵ Read probably *viśabbhūve tath°*, or possibly *viśabbhūve tath°*, dat.sg.m., as written in Chinese 毘舍浮呬. It may well be confused with Skt. *viśabbhāve*, dat., which one would expect here!

namo viśabbhū<ve> tathā(.3)gatāya

曩謨毘舍浮吠怛他(4)藥多野敬禮毘舍浮如來

नमो क्रकसंधं(.5)य (read prob.: क्रकसंधाय) तथागताय

namo krakasaṃdhā(.5)ya⁶ tathāgatāya

曩謨迦羅拘孫馱(6)野怛他藥多野敬禮拘樓孫如來

नमो कन(.7)कमुणिये (read: °मुनिये, or poss. °मुनये) तथागताय

namo kana(.7)kamuniye⁷ tathāgatāya

曩謨迦曩(8)迦牟曩曳怛他藥多野敬禮拘那含牟尼如來

न(.9)मो काश्यप्यै (read: काश्यपाय) तथागताय

na(.9)mo kāśyapāya⁸ tathāgatāya

曩(10)謨迦葉婆野怛他藥多野敬禮迦葉如來

(.11) *नमो शैक्यमुनिये (read: शाक्य°, and poss. °मुनये) तथागताय*

(.11) *namo śākyamuniye⁷ tathāgatāya*

(.12) 曩謨尺迦牟曩曳怛他藥多野(14)敬禮尺迦牟尼如來

(.13) *नमो आर्यवलोकिते(.15)धर्यै (read: आर्यावलोकितेश्वराय) बोधिसत्त्वय (read: °सत्त्वाय)*

(.13) *namo āryāvalokite(.15)śvarāya bodhisattva<ya>⁹*

曩謨阿利耶合縛路枳帝(16)濕縛合羅野冒地薩多縛合野敬禮聖觀自在菩薩

⁶ Read doubtlessly *krakasaṃdhāya*, dat.sg.m.; = 迦羅拘孫馱野; but the Chinese characters may suggest something like *Kraku(t)sundhāya*, or else; cf. e.g. Edgerton, *BIISD*, p. 196b: *Kraku(c)chanda* (1) (= Pali *Kasumdhā*), s.v., with variant readings *Krakutsanda*, *Kakutsunda*, **Krakutsunda*! Cf. Mahāvīyūtpatti, ed. Sakaki, Nos. 90 *Krakucbanda<h>*, 91 *Kakut-sundab*.

⁷ Read probably °*munaye*, dat.sg.m., as correctly in 迦羅迦牟曩曳 and 尺迦牟曩曳 though both the dental *n* and cerebral *ṇ* are written in the same character 曩. Note further that -*ṇi*- (with cerebral *ṇ*) in *Kanakamuniye* must be a scribal mistake in Siddham script, while -*ni*- (with dental *n*) is written in *Śākya*°. This oblique case ending in -*īye* must be analogous to the feminine form (cf. Edgerton, *BIISGr*, §10.90, 10.97).

⁸ Read *kāśyapāya*!

⁹ Read *āryāvalokiteśvarāya bodhisattvāya*; but see next note!

धि(17)ष्टित-शुद्धे (one would here expect a reading like: सर्व-बुद्धाधिष्ठित-°)
 <dhi(17)ṣṭhita-śuddhe>

<地(18)瑟恥_{二合}多秣第_{三合}持_{三合}淨>¹⁰

वज्रि व(19)ज्र-गर्भे वज्रां (read: वज्रं) भाव(21)तु (read: भवतु)
 vajri vajrā-garbhe vajraṃ bhavatu

縛口哩_{二合}縛(20)日羅_{二合}藥_{三合}陛_{三合}藥_{三合}縛日覽_{二合}婆_{三合}浮(22)覩_{三合}藥_{三合}¹¹

मम श(23)रिरं (read: शरीरं) सर्व-सत्त्वनं (read: °-सत्त्वानां) च
 mama śarīraṃ sarva-satvānāṃ ca

麼_{三合}麼_{三合}是我之義自稱姓名。爲他人明稱_{三合}他姓名。已上第八金剛供養門 設(24)哩_{三合}覽_{三合}薩_{三合}縛_{三合}薩_{三合}怛_{三合}縛_{三合}難_{三合}左_{三合}

कय(25)परिविशुद्धे (read: काय-°) सर्व-गति-प(25)रिशुद्धे
 kāya-pariśuddhe sarva-gati-pariśuddhe

迦_{三合}野(26)跋_{三合}哩_{三合}尾_{三合}秣_{三合}第_{三合}薩_{三合}縛_{三合}識_{三合}底_{三合}跋_{三合}(28)哩_{三合}秣_{三合}第_{三合}淨_{三合}

सर्व-तथागता(27)श्च मे समश्वासयंतु (read: समाश्वा°) (col. c, l. 1) सर्व-तथागत-
 sarva-tathāgatāś ca me samaśvāsayantu sarva-tathāgata-

薩_{三合}縛_{三合}怛_{三合}他_{三合}藥_{三合}多_{三合}室_{三合}者_{三合}銘_{三合}三_{三合}麼_{三合}濕_{三合}縛_{三合}娑_{三合}琰_{三合}覩_{三合}(385c2)薩_{三合}縛_{三合}怛_{三合}他_{三合}藥_{三合}多_{三合}

समाश्वा(3)साधिष्ठते (read: °श्वासाधिष्ठिते) बुद्धा (5) बुद्धा विबुद्धा
 samāśvāsādhīṣṭhite budhya budhya vibudhya

三_{三合}麼_{三合}濕_{三合}縛_{三合}(4)_{三合}娑_{三合}地_{三合}瑟_{三合}恥_{三合}帝_{三合}沒_{三合}地_{三合}野_{三合}(6)_{三合}沒_{三合}地_{三合}野_{三合}尾_{三合}沒_{三合}地_{三合}野_{三合}

विबु(7)द्धा (read them all four perb.: बुध्, budhya, vi°) बोधय बोधय विबोध(9)य विबोधय
 vibudhya bodhaya bodhaya vibodhaya vibodhaya

尾_{三合}沒_{三合}(8)地_{三合}野_{三合}冒_{三合}駄_{三合}野_{三合}冒_{三合}駄_{三合}野_{三合}尾_{三合}冒_{三合}駄_{三合}(10)野_{三合}尾_{三合}冒_{三合}駄_{三合}野_{三合}能_{三合}令_{三合}覺_{三合}悟_{三合}。能_{三合}令_{三合}覺_{三合}悟_{三合}。能_{三合}令_{三合}覺_{三合}悟_{三合}。能_{三合}令_{三合}覺_{三合}悟_{三合}。

¹⁰ This is certainly misplaced. It is not preceded by Avalokiteśvara Bodhisattva, but with all the Buddhas, i.e. sarva-buddhā° before the enumeration of the seven Buddhas; cf. *supra* n. 2.

¹¹ This must be emended to 婆縛覩, as the text in Siddham script suggests, i.e. bhāvatu (incorrectly written bhāvatu, as in other versions!). 婆浮覩 (with 浮, i.e. bhā) may well be influenced by the original root, bhā-?!. Cf. the above mentioned Tathāgata Viśabhū: 毘舍浮! Cf. *Text Z* n. 18!

समन्त-(.11)परिशुद्धे सर्व-तथागत-(.13)हृदया-

samanta-pariśuddhe sarva-tatbāgata-bydayā-

三滿<多>(跛)(.12)跛¹²哩秣第^{普通}薩縛怛他去^引囉多(.14)乞哩^{二合}娜野^引

धिष्टनधि(.15)ष्ट- (read: °धिष्ठानाधिष्ठित-)

°dhiṣṭhānādhiṣṭhita-

地瑟吒^{二合}瑟地(.16)瑟恥^{二合}多^{一切如來}力所加持

महा-मुद्रि

mahā-mudri

麼賀^引母捺哩^{二合}(.18)^{大印。所謂如來大印。已上第九菩薩清淨門。}

(.17) स्वाहा * समप्त (read: समाप्तम् or poss. समाप्ता)

svāhā * samāpam (or read: samāptā)

娑縛^{二合}賀^引吉^上之句。又云成就之義。已(.19)^{上第十成}就涅槃門

(.20)師曰。此陀羅尼凡有九本。所謂杜行鎧月照(.21)三藏。義淨三藏。佛陀波利
善無畏三藏。金剛(.22)智三藏。不空三藏等所譯本。及法崇注釋。弘(.23)法大師。
所傳梵本等也之中今以弘法大師(.24)梵本。與金剛智三藏所譯加字具足漢字本
(.25)所雙書也。件梵本是弘法大師在唐之日。惠(.26)果阿闍梨所授多羅葉梵本也。
七佛及觀音(.27)梵號裁于此中。異他梵本也。後人知之
(.28)佛頂尊勝陀羅尼
(.29) 建久二年辛

¹² 多 is missing, but 跛 is superfluously duplicated instead at the change of lines!

III-Ba.

傳空海所傳・佛頂尊勝陀羅尼・梵漢字雙書本之中

佛頂尊勝陀羅尼梵本¹

Text from Taisho No. 974B: XIX p. 384b17-385c17

Text Presented in Devanāgarī

(Page 384, column b, line 17) ॐ नमो भगवते त्रै-लो(.19)का-प्रतिविशिष्टा(.21)य बुद्धाय भगवते (.23)
 तद्वाथा ॐ (col. c, line 1) विशोधय विशोधय (read: विशो०) स(.3)म-सम-समन्तावभस-(read:
 ०भास-)(.5) स्फरण-गति-गहान- (read: ०-गहन-)(.7)स्वभाव-विशुद्धे (.9) अभिषिंचतु मां सुगत-(.11)वर-
 वचन-(read prob.: ०-वचना-०, or ०-वचनामृत० in sandhi with the following अ०) अमृताभि(.13)पैकै
 (read: ०भिषेकैः) महा-मन्त्र-पदै (read prob.: ०पादैः) (.15) आहर अहार (read: आहर २) (.17) आयुः-
 सन्धरणि (read: सन्धारणि) शो(.19)धय शोधय गगन-विशुद्धे (.21) उष्णीष-विजय-विशु(.23)द्धे सहस्र-
 रश्मि-सं(.25)चोदिते सर्व-तथागताव(.27)लोकनि षट्पारमिता-(read: षट्-पारमिता-)(.29)परिपूरणि सर्व-
 तथागत-(p. 385, col. a, l. 1) हृदयाधिष्ठानेधिष्ठि(.3)त-(read: ०ष्ठानाधिष्ठित-)महा-मुद्दि व(.5)ज्ज-काय-संहतन-
 (read: ०-संहतन-०) विशु(.7)द्धे सर्ववरणिपयदु(.9)र्गति-परिविशुद्धे (read: ०सर्वावरणापय-०) (.11)
 प्रतिनिव(.13)र्तय आयुः-शुद्धे स(.15)मयैधिष्ठते (read: समयाधिष्ठिते) मणि मणि (.17) महा-मणि
 त(.19)थता-भूत-कोटि-परिशुद्धे (.21) विस्फुट-बुद्धि-शुद्धे ज(.23)य जय विजय विजय (.25) स्मर स्मर
 स(.27)र्व-बुद्धा²

नमो विपश्चिने (read: विपश्चिने) तथा(.29)गताय

नमो शिखिने तथा(col. b, l. 1)गताय

नमो विशभू (read prob.: विशभुवे or विशभूवे)³ तथा(.3)गताय

नमो क्रकसंधं(.5)य (read prob.: क्रकुसंधाय) तथागताय

¹ According to the colophon, the Indic text in Siddham script is said to be a copy from a palm-leaf manuscript brought back by Kūkai (弘法大師・空海) and the other in Chinese characters from the one transliterated by Vajrabodhi (金剛智). Hui-kuo (惠果) had conferred the palm-leaf manuscript on Kūkai during his stay in China. As seen in the text, if it had ever existed in Japan, this has been transmitted with scribal miscopying one after another. In this chapter I have copied the text in the Devanāgarī script to see how it has been transmitted. Some mistakes reveal how they take place. To my regret, I have not succeeded to obtain a Siddham script for a word processor. — Let us hope to see the original manuscript recovered somewhere!

² Cf. III-B, n. 2!

³ Cf. III-B, n. 5!

नमो कन⁽⁷⁾कमुणिये (read: °मुनिये) तथागताय

न⁽⁹⁾मो काश्चप्यैय (read: काश्चपाय) तथागताय

(.11) नमो शैकामुनिये (read: शाक्य°) तथागताय

(.13) नमो आर्यवलोकिते⁽¹⁵⁾धर्यैय (read: आर्यावलोकितेधराय) बोधिसत्त्वय (read: °सत्त्वाय)

धि⁽¹⁷⁾ष्टित-शुद्धे (one would here expect a reading like: सर्व-बुद्धाधिष्ठित-°) वज्रि व⁽¹⁹⁾ज्र-गर्भे वज्रां
(read: वज्रं) भाव⁽²¹⁾तु (read: भवतु) मम श⁽²³⁾रिरं (read: शरीरं) सर्व-सत्त्वनं (read: °-सत्त्वानां) च
कय-⁽²⁵⁾परिविशुद्धे (read: काय-°) सर्व-गति-प⁽²⁵⁾रिशुद्धे सर्व-तथागता⁽²⁷⁾श्च मे समधसयंतु (read:
समाधा°) (col. c, l. 1) सर्व-तथागत-समाध⁽³⁾साधिष्टते (read: °श्वासाधिष्ठिते) बुद्धा⁽⁵⁾ बुद्धा विबुद्धा विबु⁽⁷⁾द्धा
बोधय बोधय विबोध⁽⁹⁾य विबोधय समन्त-⁽¹¹⁾परिशुद्धे सर्व-तथागत-⁽¹³⁾हृदयाधिष्ठनधि-⁽¹⁵⁾ष्टत- (read:
°धाष्ठानाधिष्ठित-) महा-मुद्दि⁽¹⁷⁾ स्वाहा * समप्त (read: समाप्तम्, or poss. समाप्ता)

遊余白

悉曇学に関して、かつて少し触れたことがあるだけだが (e.g. Yuyama in Warder Volume 1993), 日本梵学史の枠内でも興味は尽きない。その後、種々の分野の専門家の論著に、目を惹くものが多い。色々の角度から悉曇を見なければならぬと考えさせられる。¹ ここでは難題を避けて、大企画の最終回を飾った待望の書・源顯兼編『古事談』(13世紀初頭?)の一節に引用されている兼意(*1072)の言葉で、余白を埋めたい。彼は仁和寺寛意に師事、その北院で傳法灌頂、後に師寛意を慕って高野山に入り、遍照光院に人住した仏画・梵字の達人だったという。² 上記の建久二年(1191)の東寺写本に少し先立つ頃の話として興味を惹く。その梵字に関する問答が面白いと思う。成蓮房兼意に触れた辺りで、鳥羽第五皇子・覺性が問うて、兼意が答える件である。³

件の兼意は、高名の梵字書きなり。五宮御室、「梵字は何様に書くべきぞ」と問はしめ給ひければ、「梵字と立石とは、頗るうつぶきたるがよく候ふなり」と申しけれ。

実は、これを読んで、先代の高野山遍照光院主・高野山大学教授・酒井繁創眞博士(1909-1988)の深く豊かな学殖に、専門を異にしながらも折々に触れ、その梵字の達筆にも親しく接することができたことを、いま懐しく幸せに想い起こしている。それにしても先生の急逝は誠に惜しく悲しかった。類焼という大火にあった翌月間もなくであった。

¹ See e.g. Saroj Kumar Chaudhuri, *Siddham in China and Japan* (= *Sino-Platonic Papers*, ed. Victor H. Mair, LXXXVIII) (Philadelphia: Department of East Asian Languages and Civilizations, University of Pennsylvania, December 1998), 9, 124 p. — *An elaborate work with lots of information of the relevant topics.*

— Being a Japanologist, he has recently brought out a book: *Hindu Gods and Goddesses in Japan* (New Delhi: Vedams, 2003), (xvii), 184 p. (with no ill.).

Frits Staal, *The Sound Pattern of Sanskrit in Asia: An Unheralded Contribution by Indian Brahmins and Buddhist Monks* ("Sanskrit in Asia" to celebrate the Golden Jubilee of Her Royal Highness Princess Mahachakri Sirindhorn: Inaugural Session, Bangkok, June 23, 2005), A4: 30 pp.

² 川端善明・荒木浩校注、古事談・続古事談 (= 新日本古典文学大系, XLI) (東京・岩波書店, 2005), 『人名一覽』, p. 18a; 参看・三木紀人, "古事談", 岩波・日本古典文学大辞典, II (1984), p. 608b-d; 補訂版・国書総目録, III (1965, rev. 1990), p. 432b-c.

³ 上掲書, p. 306f., cum n. 9.

III-Bb.

傳空海所傳梵本・佛頂尊勝陀羅尼・梵漢字雙書本中之

過去七佛・觀自在菩薩・歸依文

Homage to the Seven Buddhas and Avalokiteśvara Bodhisattva

(Taisho 974B: XIX 385a27-b16)

*In the Siddham script quite a few long-vowel signs on proper names are neglected,
while in the Chinese characters a few cluster signs are neglected.*

a27/29-28/30: *namo vipaśyine tathāgatāya* / 曩謨毘婆尸寧怛他藥多野^{敬禮毘婆尸³如來}a29/b1-a30/b2: *namo śikṣine tathāgatāya* / 曩謨尸棄曩¹怛他藥多野^{敬禮尸棄¹如來}b1/3-2/4: *namo viśabhuve tathāgatāya*² / 曩謨毘舍浮吠怛他藥多野^{敬禮毘舍浮²如來}b3/5-4/6: *namo krakusandbhāya*³ *tathāgatāya* / 曩謨迦羅拘孫駄野怛他藥多野^{敬禮拘維孫³如來}b5/7-8/10: *namo kanakamuniye*⁴ *tathāgatāya* / 曩謨迦曩迦牟曩曳怛他藥多野^{敬禮拘那含牟尼⁴如來}b7/9-8/10: *namo kāśyapāya tathāgatāya* / 曩謨迦葉婆野怛他藥多野^{敬禮迦葉⁴如來}b11-12/^{13/14}: *namo śākyamuniye*⁴ *tathāgatāya* / 曩謨尺迦牟曩曳怛他藥多野^{敬禮凡迦牟尼⁴如來}b13/15-14/16: *namo āryāvalokiteśvarāya bodhisattvāya* / 曩謨阿利耶^合縛路枳帝濕縛^合羅野
目地薩多縛^合野^{敬禮聖觀自在菩薩}¹ Cf. III-B, n. 4!² Cf. III-B, n. 5!³ Cf. III-B, n. 6!⁴ Cf. III-B, n. 7!

*This does not claim to be a table made exhaustively,
but is intended to see hints for more practical comparison.
For further details see supra I-D & II-C: Tables of Alphabets in D & Z,
as well as infra III-D: Index to Amoghavajra's Uśnīṣa-Vijaya Dhāraṇī Texts D & Z.*

1. Single Characters:

	<i>D</i>	<i>A</i>	<i>B</i>	<i>Z</i>	<i>Notes</i>
<i>kai(b)</i>	𪛗	𪛗	𪛗	𪛗	
<i>ko</i>	句	俱	句	句	
<i>ga</i>	𪛗 𪛗	𪛗	𪛗 𪛗	𪛗	E.g. in <i>gati</i> -, <i>°gata</i> -.
<i>ca</i>	𪛗 𪛗	𪛗	𪛗	𪛗	
<i>ti</i>	致	𪛗	致	致	
<i>ta</i>	𪛗 𪛗 𪛗	𪛗 𪛗	𪛗	𪛗 𪛗	
<i>tba</i>	他	他	多	他	
<i>di</i>	你	𪛗	𪛗	你	
<i>na</i>	𪛗	𪛗 𪛗	𪛗	𪛗	A 𪛗 in 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗- <i>sambatana</i> -°.
<i>ni</i>	𪛗 𪛗	𪛗	𪛗	𪛗 𪛗	D 𪛗 is used in the title alone.
<i>dba</i>	𪛗 𪛗	𪛗	𪛗	𪛗	D 𪛗 is used in the title alone.
<i>dbe</i>	第	提	第	第	
<i>ni</i>	𪛗	一	𪛗	你	
<i>bhi</i>	𪛗	𪛗	𪛗	𪛗	
<i>bbu</i>	部	步	部	步	
<i>mi</i>	𪛗	一	𪛗	𪛗	Phrase ... <i>ṣat-pāramitā</i> -°, missing in A!
<i>ya</i>	野 也	耶 也	野 也	也 野 𪛗	A 耶 in 𪛗耶 <i>kāya</i> .
<i>yub</i>	𪛗 欲	欲	𪛗	欲	
<i>ra</i>	𪛗 𪛗	𪛗	𪛗	𪛗	
<i>ram</i>	𪛗	𪛗	𪛗	𪛗 𪛗	
<i>va</i>	𪛗 𪛗	𪛗	𪛗	𪛗 𪛗	
<i>su</i>	𪛗	𪛗	𪛗	𪛗 𪛗	
<i>sa</i>	𪛗 沙	沙	𪛗	沙	
<i>se</i>	𪛗	𪛗	𪛗	𪛗	
<i>ba</i>	𪛗	𪛗	𪛗 𪛗	𪛗	

	D	A	B	Z	Notes
<i>jra</i>	日羅囉	日囉	日羅	日囉	In <i>vajra</i> .
<i>jri</i>	日哩	日哩	日哩	日哩	In <i>vajri</i> .

<i>tadya</i>	怛你也	怛爾也	怛儻也	怛你多	In <i>tad-yatbā</i> .
<i>durga</i>	訥𑖀	—	訥哩𑖀	訥𑖀	<i>A</i> misses a phrase ° <i>paya-durgati-pari</i> °.
<i>pra</i>	鉢羅・鉢囉	鉢囉	鉢羅	鉢羅	
<i>manta</i>	滿哆・毋哆	滿多	滿路	滿多	
<i>śca</i>	室者	—	室者	—	°- <i>tatbāgatās ca</i> , missing in <i>A</i> & <i>Z</i> .
<i>śmi</i>	濕茗	濕弭	濕茗	濕弭	
<i>ṣṭa</i>	瑟姪	瑟姪	瑟吒	瑟吒	
<i>ṣṭha</i>	瑟姪	瑟佗	瑟姪	瑟吒	
<i>ṣṭhi</i>	瑟恥	瑟恥	瑟恥	瑟耻	
<i>ṣṇī</i>	瑟拏	瑟拏	瑟拏	瑟膩	
<i>siñca</i>	𑖀𑖐左	𑖀𑖐左	𑖀𑖐左	𑖀𑖐者	
<i>spha</i>	娑頗	薩頗	娑頗	娑頗	
<i>sphu</i>	娑普	娑佈	娑普	薩普	In ° <i>sphuta</i> .

3. Variant Readings of Words in Chinese Characters:

	D	A	B	Z	Notes
<i>garbhe</i>	𑖀𑖐𑖐𑖐	𑖀𑖐𑖐	𑖀𑖐𑖐	𑖀𑖐𑖐	
° <i>nivarta</i>	𑖀𑖐𑖐𑖐𑖐	𑖀𑖐𑖐𑖐	𑖀𑖐𑖐𑖐𑖐	你𑖐𑖐𑖐	In <i>pratinivartaya</i> .
<i>buddha</i>	沒駄	勃駄	沒駄	沒駄	
<i>buddhi</i>	沒地	勃地	沒地	沒地	
<i>budhya</i>	沒地野	勃𑖐	沒地野	沒𑖐	
<i>mudri</i>	母捺哩	𑖀𑖐/𑖀𑖐捺𑖐	母捺𑖐	母捺哩/怛𑖐	Cf. Text <i>Z</i> n. 9 & 23 on 𑖀𑖐𑖐𑖐.
° <i>myta</i>	蜜哩哆	蜜𑖐𑖐𑖐	蜜𑖐𑖐𑖐	蜜哩多	Of <i>amṛta</i> .
<i>suddhe</i>	𑖀𑖐𑖐	𑖀𑖐𑖐	𑖀𑖐𑖐	舜𑖐𑖐・𑖀𑖐𑖐	
<i>hṛdaya</i>	𑖀𑖐𑖐𑖐𑖐	—	𑖀𑖐𑖐𑖐𑖐	—	Phrase °- <i>hṛdaya</i> -° missing in <i>A</i> & <i>Z</i> .

III-D.

不空

佛頂尊勝陀羅尼

加句靈驗本・注義

索引

Index to Amoghavajra's *Uṣṇīṣa-Vijayā Dhāraṇī* Texts D and Z

Transliteration in Chinese characters is given hereunder without phonetic signs with few exceptions.

Every Indic Aksara with its corresponding Chinese character(s) is to be found on the Tables of Phonetic Alphabets.

The numbers of word order alone are cited in the column Z when it offers the same characters as D (cf. supra I-D & II-C).

Chinese characters in Z are recorded in gothic italic only where they are different from D.

On account of limited space and ability I have made very little reference to the question of comparison between the Indic and Sinitic sounds. Needless to say, there is a long history of research in the relevant field particularly of the French Sinological circle since Stanislas Julien (1799-1873; cf. Yuyama, *Engène Burouff*, Iachioji-Tokyo 2000, esp. §3.2.5), and among others Henri Maspero in relation to the present concern (cf. supra I, §4.1.2). Since then a number of scholars have grown up under the stimulus of foreign scholars in Peking. At last this fact has just been pointed out by Xiaoqing Diana Lin, *Peking University: Chinese Scholarship and Intellectuals, 1898-1937* (= *SUNY Series in Chinese Philosophy and Culture*) (Albany: SUNY Press, 2005), esp. p. 1124. In China I would cite without hesitation the pioneering works by Lo Ch'ang-p'ei (羅常培: 09.VIIL.1899-13.XII.1958; cf. Yuyama, "Miscellanea Philologica Buddhica (III)", *ARIRIAB*, 2004-2005, esp. p. 393; §5.3.0-2), who first contributed to this field with an enlightening article: "梵文韻言五母的藏漢對音研究", 中央研究院歷史語言研究所《集刊》, III, 2 (1931), p. 263-275 (with 2 tables on a large folded folio). This has fortunately been reprinted in a collection of his selected works, for example in the first place in 1963: 羅常培語言學論文選集 (北京・商務印書館, 1963), p. 54-64, with folded tables. One may also consult a new careful edition of his collected works with a foreword by Chou Ting-i (周定一): 羅常培語言學論文集 (北京・商務印書館, 2004), p. 70-84. I must also mention his illuminative work on the subject in voluminous book form published immediately after that from Shanghai (1933): 唐五代西北方言 (= 國立中央研究院歷史語言研究所・甲刊甲種之十二) (上海 1933), (iii), XXIII, 223 p., incl. num. tables, VIII pl. after p. 168, III folded tables after p. 189. For further details on Lo Ch'ang-p'ei and his works see e.g.: 北京市語言學會編／傅懋勳・周定一・羅常培主編／羅常培紀念論文集 (北京・商務印書館, 1983), 447 p., incl. num. tables, photos, & facsimiles; with a very useful chronological list of his works compiled by Chou Ting-i (p. 434-445).

	D	Z	Brief Notes
¹ <i>adhi-sṭhā-</i> : <i>adhiṣṭhita-</i> °	53,88,123°地瑟耶咤 (88°多!)	46,82,110°地瑟耶多	° <i>adhiṣṭhānādhī-</i> °, cpd. — D 咤 : Z 咤.
² <i>adhi-sṭhā-</i> : <i>adhiṣṭhite</i>	69,113°地瑟耶帝	62,102°地瑟耶帝	<i>samaya-</i> °, cpd. — D 咤 : Z 咤.
<i>adhiṣṭhāna-</i> °	52,122°地瑟陀義	45,109°地瑟陀義	° <i>adhiṣṭhita-</i> °, cpd.
<i>abhi-si-</i> : ° <i>śīracu</i>	22 阿鼻訖左觀	22 阿鼻訖左觀	Cf. <i>abhi-śka-</i>
<i>abhiṣeka-</i> : ° <i>kaib</i>	28 鼻囉訖	28 毗囉訖	<i>amṛtābhī-</i> °, cpd.; cf. <i>abhi-śc-</i>
<i>amṛta-</i> °	27 阿蜜哩咤	27 阿蜜哩多	° <i>abhiṣekaib-</i> °, cpd.
<i>avabāṣa-</i> °	16°轉婆娑	16	<i>samantā-</i> °, cpd.
<i>avabokana-</i> : ° <i>ni</i> : ° <i>ni</i>	45°轉路迦賴	Missing 45 of D	° <i>avabokani-</i> °, cpd.
<i>abam</i>	⇒ <i>mām, mama, me</i>		
<i>āpaya-</i> °	62°播野	55	<i>sarvāvaranāpaya-</i> °, cpd.; cf. <i>Y°karmāvarana-</i> °
<i>āvarana-</i> °	61°轉囉拏	54	<i>sarvā-</i> °, cpd.
<i>āyus-</i> : ° <i>ayuh-</i> °	31 阿庚 (read prob. 庚, 66 阿欲)	31 阿欲, 59 阿欲	° <i>samdhāravi-</i> , 31; ° <i>-śuddhe</i> , 66/59; cf. <i>Text D</i> n. 8!
<i>ā-bi-</i> : ° <i>āvara</i>	29, 30 阿賀囉 (refrain)	29, 30 阿賀囉 (refrain)	2 imper.sg.
<i>asvīṣa-</i> °	37 耶瑟花灑	37 耶瑟風沙	First member of a cpd.; ° <i>vijaya-</i> °, cpd.
<i>om</i>	10 唵	10	ॐ
<i>kāya-</i> : ° <i>kāya-</i> °	57,100 迦野	50,94 迦也	<i>vāja-kāya-samhatana-</i> ° <i>śuddhe</i> , cpd.; ° <i>-pariśuddhe</i> , cpd.
<i>koṭi-</i> °	76 句致	69	<i>tathatā-bhūta-</i> °, cpd.
<i>gagana-</i> °	35 誡武曩	35	° <i>-vīśuddhe</i> , cpd.
<i>gati-</i> °	18,103 誡底	18,97 囉底	Cf. <i>Text D</i> n. 6, Z n. 5.
<i>garbha-</i> : ° <i>garbhe</i>	92 囉囉陸 合	86 囉陸	Cf. <i>Text Z</i> n. 16, & <i>Z Table</i> n. 3! — D 囉 : Z 囉.
<i>gabana-</i> °	19 誡賀曩	19 誡訶曩	Cf. <i>Text D</i> n. 6.
<i>ca</i>	99(者; 107 者	93; missing 107 of D	Enclitic particle "and"
<i>cud-</i>	⇒ <i>saṃ-cud-</i> , ° <i>codite</i>		
<i>ji-</i>	⇒ <i>jaya, vi-</i> °		
<i>ji-</i> : ° <i>jaya</i>	81 惹野 (not repeated)	74,75 惹也 (refrain)	2 imper.sg.; cf. <i>vijaya</i> .
<i>tathatā-</i> °	74 相圖咤	67 相他多	° <i>bhūta-koṭi-pariśuddhe</i> , cpd.
<i>tathāgata-</i> °	44,50 相他誡咤; 111°咤多; 120°咤多	Misses 44,50 of D; 100,108 相他囉多	Used as a stem: <i>sarva-</i> ° — D 囉 : Z 囉.
<i>tathāgata-</i> : ° <i>as ca</i>	106 相他囉咤望者 合	Missing 106 of D	Nom.pl.masc.: <i>sarva-</i> °
<i>tad-</i> °	8 恒怛	8	<i>tad-yatbā</i> 恒怛也
<i>trai-</i> °	3 相囉	3	<i>trai-lokya-</i> 相囉路想也
<i>dergati-</i> °	63 訶囉底	56 訶囉底	<i>sarvāvaranāpaya-</i> °, cpd. — D 囉 : Z 囉.
<i>namas-</i> : ° <i>namo</i>	1 曩謨	1	

<i>paripāraṇa-</i> , ° <i>ṇi</i> - : ° <i>ṇi</i>	48 跛哩布囉尼	Missing 48 of D	<i>sat-pāramitā-</i> °, cpd.
<i>pari-vi-śudh-</i> : <i>pariśuddhe</i>	64 跛哩尾疏第	57 跛哩尾第	Cf. Z 95 尾第, i.e. ° <i>śuddhe</i>
<i>pari-śudh-</i> : <i>pariśuddhe</i>	77, 104, 118 跛哩疏第	70, 98 跛哩第	Z: °第 & °第 mixed up.
<i>pāramitā-</i> °	47 播囉咄哆	Missing 47 of D	<i>sat-</i> °, cpd.
<i>prati-ni-ṣṛt-</i> : <i>pratinivṛṇya</i>	65 鉢囉底賴囉囉多野	58 鉢囉底你蘇多也	2.imper.sg.; cf. also Text Z n. 3!
<i>prativṛṣṭa-</i> : ° <i>āya</i>	5 鉢囉底尾始瑟吒野	5° 尾始瑟吒野	
<i>¹buddha-</i> : ° <i>buddha-</i> °	87 沒駄	81	<i>sarva-buddhādhiṣṭhita-śuddhe</i> , cpd.
<i>²buddha-</i> : ° <i>āya</i>	6 沒駄野	6	
<i>buddhi-</i> °	79 沒地	72	<i>visphūta-buddhi-śuddhe</i> , cpd.
<i>¹budh-</i> : <i>budh-ya</i>	114 沒地野 (not repeated)	103, 104 沒地 (refrain)	IV: 2.imper.sg.; cf. <i>bodhaya</i> .
<i>²budh-</i> : <i>bodh-aya</i>	115, 116 冒駄野 (refrain)	105 冒駄也 (not repeated)	1: 2.imp.sg.caus.; cf. <i>budhya</i> . Cf. Text Z n. 20!
<i>bhagavat-</i> : ° <i>re</i>	2, 7 婆伽婆帝	2, 7	
<i>bhū-</i> : <i>bhavatū</i>	94 婆囉視	88	3.imper.sg.
<i>bhūa-</i> °	75 步哆	68 步多	<i>tathatā-bhūta-koṭi-pariśuddhe</i> , cpd.
<i>manī-</i> : <i>manī</i>	70, 71, 73 麼泥	63, 64, 66	73/66 <i>mahā-</i> °, cpd.
<i>mabar-</i> : <i>mahā-</i> °	54, 72, 124 摩賈	47, 65, 111 摩訶	° <i>mudrī-</i> , ° <i>manī</i> , cpds.
<i>mama</i>	95 麼麼	89	1.pron.gen.sg.; cf. <i>me</i> .
<i>mām</i> : <i>mām</i>	23 鎗	23	1.pron.acc.sg.
* <i>mudrī-</i> : <i>mudrī</i>	55, 125 母捺哩	48; and 112 母但	<i>mahā-</i> °, cpd., voc.f.sg.; Cf. Text Z n. 9 & 23!
<i>me</i>	108 銘	Missing 108 of D	Gen.-dat.sg.pron.encl. (with <i>sam-ā-śvas-</i>); cf. <i>mama</i> .
<i>yathā</i>	9 也他	9	<i>tad-yathā</i> 担你他
<i>rasmi-</i> °	41 囉濕若	41 囉濕弼	<i>sabāsa-</i> °, cpd.
<i>lokyā-</i> °	4 路枳也	4	<i>trāt-lokyā-</i> 担囉路枳也
<i>vacanā-</i> °	26 喇左囊	26 喇者囊	Cf. Text Z n. 6.
<i>¹vāṇa-</i> : <i>vāṇa-</i> °	56 喇日羅; 91 喇日囉	49 喇日囉, 85	° <i>kāya-</i> °, ° <i>garbha-</i> °, cpds.
<i>²vāṇa-</i> : <i>vāṇan</i>	93 喇日覽	87 喇日覽	Nom.sg.nt., i.e. ~ <i>bhacatu!</i> Cf. Text Z n. 17!
* <i>vāṇrī-</i> : <i>vāṇrī</i>	90 喇日哩	84 喇日哩	Voc.sg.fem. Cf. further Text Z n. 15!
<i>vara-</i> °	25 喇囉	25	
<i>vijaya-</i> : ° <i>vijaya-</i> °	38 尾{惹野}	38 尾惹也	<i>uṣṇīsa-</i> °, a stem in cpd.
<i>vi-jī-</i> : <i>vijaya</i>	82, 83 尾惹野 (refrain)	76, 77 尾惹也 (refrain)	2.imper.sg. (cf. supra <i>jī-</i>).
<i>¹vi-śudh-</i> : <i>viśodhaya</i>	11, 12 尾式駄野	11, 12 尾成駄也	2.imper.sg.
<i>²vi-śudh-</i> : ° <i>viśuddhe</i>	21, 36, 39, 59 尾疏第	21 尾第, 36° 成第, 39, 52° 第	Last member of cpds.; cf. <i>śudh-</i> , Note 第 & 第 in Z.
<i>visphūta-</i> °	78 尾婆普吒	71 尾婆普吒	° <i>buddhi-śuddhe</i> , cpd.; cf. Skt. ° <i>spṛṣṭ-</i> , ° <i>spṛṣṭita-</i> .

<i>vyt-</i>	⇒ <i>prati-ni-vyt-</i>			
<i>sarira-</i> : <i>sariraṇa</i>	96 設哩囉		91 設哩囉	
¹ <i>śudh-</i>	⇒ ^{1/2} <i>ut-</i> °, <i>pari-</i> °, <i>pari-ut-</i> °, ^{2/3} <i>śudh-</i>			
² <i>śudh-</i> : <i>śudhaya</i>	33, 34 式駄野 (refrain)		33, 34 式駄也 (refrain)	2. imper.sg.
³ <i>śudh-</i> : <i>śuddhe</i>	67, 80, 89 禰弟		60, 73, 83, 106 禰弟	Cf. ² <i>vi-śudh-</i> . Z differs from D: <i>samanta-parisuddhe</i> !
<i>śvas-</i>	⇒ <i>sam-ā-śvas-</i>			
<i>śas-</i> : <i>śat-</i> °	46 沙訶		Missing 46 of D	° <i>pāramitā-paripūrāṇi</i> , cpd.
<i>sambhātana-</i> °	58 僧賀多曷		51 僧詞多曷	<i>vajra-kāya-</i> °, cpd.
<i>sam-cud-</i> : ¹ <i>rodite</i>	42 散祖你帝		42	<i>sam-cud-ayati</i> , caus.
<i>sattva-</i> : <i>sattvānām</i>	98 薩祖囉(囉)		92	
<i>śaṇḍhāraṇa-</i> : ¹ <i>ni</i>	32 散駄囉泥		32	<i>āyub-</i> °, cpd.
² <i>śanda-</i> : <i>śanda-</i> °	14 娑摩		14	
³ <i>śanda-</i> : <i>śamāṇa</i>	13 娑摩		13 娑摩	Cf. both Texts D & Z n. 4.
<i>kamanta-</i> °	15 三滿多, 117 三摩哆		15 三滿多; missing 117 of D	Used as a stem in cpds.
<i>śāṇḍhāva-</i> °	68 三摩野		61 三摩耶	° <i>ādhiṣṭhite</i> , cpd.
<i>sam-ā-śvas-</i> : <i>śavāyayuta</i>	109 三摩濕囉娑我囉		Missing 109 of D	3. pl. imper. caus. with <i>me</i>
<i>samāktava-</i> °	112 三摩濕囉娑		101	<i>sarva-tathāgata-</i> °
<i>sarva-</i> °	43, 49, 60, 86, 97, 102, 105, 110, 119 薩囉		53, 80, 91, 96, 99, 107; missing 105 of D	Only first member of cpds.; D 43, 49 confused in Z.
<i>sahasra-</i> °	40 娑賀娑囉		40	° <i>rasmi-sammodite</i> , cpd.
<i>śi-</i>	⇒ <i>adbi-śi-</i> ; also <i>abbhaka-</i>			
<i>sugata-</i> °	24 素戔哆		24 素戔多	
<i>stbā-</i> : <i>adbi-ṣṭhā-</i>	⇒ <i>adbi-ṣṭhā-</i> : <i>adhiṣṭhita-</i>			Cf. also <i>adbi-ṣṭhāna-</i>
<i>spbarana-</i> °	17 <娑> 薩囉拏		= 17 娑薩囉拏	
<i>śm-</i> : <i>śmāra</i>	84, 85 娑摩囉 (refrain)		78, 79 (refrain)	2. imper.sg.
<i>śabbhāva-</i> ° : ¹ <i>śvabhāva-</i> °	20 (娑) 薩婆囉		= 20 娑薩婆囉	A long cpd.
<i>śvābā</i>	126 娑囉(賀)		111 娑囉囉	
<i>by-</i>	⇒ <i>ābāra</i>			
<i>brdaya-</i> °	51, 121 總哩娜野		Missing 51, 121 of D	<i>sarva-tathāgata-</i> °, cpd.

Keywords: 不空・佛頂尊勝陀羅尼・Uṣṇīṣa-vijaya Dhāraṇī / 佛頂尊勝陀羅尼注義・上野東叡山真如院・湯島根生院・龍井